

山形短期大学民話研究センター資料叢書

置賜のむかし

昔話・伝説・わらべうた

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

置賜のむかし

昔話・伝説・わらべうた

編 武 田 正

置賜のむかし

昔話・伝説・わらべうた

第一部 昔話

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
地藏浄土	地藏浄土	三枚のお札	三枚のお札	笠地藏	瓜姫子	瓜姫子	花咲か爺	虎猫	四本目の犬の足	小太きつね	十二支ばなし	大阪の蛙と京都の蛙	とき鳥	オタタカ鳥	オタタカ鳥	猿と蛙の寄合餅

30	28	25	23	21	20	17	15	13	12	11	11	10	8	8	7	5
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
佐兵ばなし	南の山	南の山の太郎さ	おんぶお化け	鬼娘の話	おせんの話	にんじん角とこんにやく舌	まま子いじめ	ゆうばりとかがみ	お糸唐糸	お糸唐糸	団子	食わず女房	地藏浄土	猿聾入	猿聾入	猫と南瓜

69	68	67	65	63	61	59	58	57	52	50	47	43	39	37	33	31
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

43 42 41 40 39 38 37 36 35
お春地藏 有馬の猫騒動 長い名の子 長い名の子 かます煙草入れ 法印と狐 山伏と狐 法印と狐

81 78 77 76 75 74 72 71 70

44 狐に化かさつた話
45 竹やぶの狐
46 生きかえつた人
47 酒田の本間さま
48 本間さま
49 八方屋長者
50 顔より心
51 孫惣の親孝行

90 89 88 86 85 83 82 81

第二部 伝説

2 1
地名・その他

97 93

第二部 わらべうた

3 2 1
なわとびうた
お手玉うた
手まりうた

113 109 103

4 集団あそび
5 口あそびうた

121 115

お正月は

お正月はええもんだ
雪のような飯くって
油のような酒のんで
木っばのような魚くって
お正月はええもんだ

第一部 昔話

1 猿と蛙びつきの寄合餅

話者 遠藤
採集 斎藤恵子
(米沢市松ヶ岬)

正月頃の話で、蛙と猿がいだったど。大きな家で餅搗きを始めたので、ずるがしこい猿は、臼がらみ餅をとって、蛙と二人で臼ごと山の頂上まで運んで行ったど。そして頂上さ行ったら猿が蛙さ言ったど。

「この臼を下さ転がして、先に迫い着いたものが、全部食べていい」と言っただ。そうすつど蛙は、

「おれは遅いからやめっぺ」

と言っただ。けれども猿は、勝つことがわかってるので、「すつぺ、すつぺ（するべえ）」と言つて、始めたど。「そーれ」と臼を落してやっただ。蛙はゆつくり降りて行っただ。そうすると山の中腹ころに木の根っこさ臼がひっかかつて、餅が木の枝さひっかかつていたのを見つ^めけで、「熱^{あち}い、熱^{あち}い」と言いながら食っただ。

先に着いてた猿は、いつまで経っても来ねな、と待ってたど。そうしているうちに、空の臼^{から}だけが落ちて来たど。猿は不思議そうに、それを見つだつたど。そしたらば蛙が餅くわえて降^おちて来たど。それを見た猿は、

「その餅、どうしたんだ」と言つたど。蛙は、

「木さ、ひっかかってたんだ」と言つたど。そして猿は、

「おれが早く着いたんだから、餅はおれのもんだ。餅呉ろ」と言つたど。蛙は、
「嫌^やんだ、嫌んだ」と言つたげんども、猿があんまり「呉ろ、呉ろ」て言うもんだから、蛙は猿の顔めがけて餅を投げてやつたど。猿は「あつい、あつい」と言つて、そんじえ顔が赤くなつたんだど。んだから仲良く分けて食わんなねぞ。

2 オタタカ鳥

話者 母 (山形市印役町)
採集 鈴木博子

とんと昔あつたど。

むかし、盲目めくらの兄んつあと弟いだっけど。弟、兄んつあさ山がらせつせとモノ取つて来て、うまいどこぼっかし、食せつだんだっけんとも、兄んつあ目見えねがつたもんだから、

「おれさ、こだいうまいものぼっかし食せるんだつたら、弟の方、おれよりなんぼか、うまいもの食つてだの、んねべが」て、弟ばうたぐつて殺して胃袋の中さいて見つど、中がら残りものとか、大根の尻つぼなのしか出て来ねくて、弟、うまいものなのさっぱり食つてねがつたのわかつたんだけど。

それから兄んつあ、弟ば殺した罪ほろぼしに、オタタカ鳥になつて、

弟殺してくやしやオタタカ鳥

弟殺してくやしやオタタカ鳥

て、日に八千八度も鳴いっただど。

3 オタタカ鳥

話者 色摩清見
採集 清水節子

(米沢市塩井)

むかし、男二人の兄弟あつたけど。兄はなまけものだったど。弟は一生けんめい働いて、うまいもの買つてきて、兄に食せつたんだど。兄は、

「おれに、こがなうまいもの食せんだから、弟はなんぼかうまいものを食つているにちがない」と思つて殺してしまつたど。腹を切つて見たら、なんぼもうまくないものしかなかつたど。兄は、ああ悪いことしてしまつたといつて死んでしまつた。

4 と き 鳥

話者 安部富子
採集 安部よう子

(高畠町和田)

むかし、とき鳥という鳥がいたけど。ある日、とき鳥が越前川原さ栗蒔いたんだど。しばらく経^たつてから、草むしんなねべなあと思つて、越前川原さ行つたけあ、

きれいに草むしらっていただけ。またしばらく経ってから、きっかけ（土を返すこと）しんなねべなあと思って川原さ行ったけあ、ちゃんときっかけさっていたけど。

「おかしいこともあるもんだ。鳥の奴にちがいない」と、とき鳥は思っていた。

取り入れの時期が来たので、また鎌をもって川原さ行ったど。そしたけあ、また今度もちやあんと刈らっていたけど。とき鳥はごしやえで、鳥のところさ行つて、

「越前川原さ、粟蒔いたのを、おまえ取ったべ」と言ったら、鳥は、

「他人ひとのもの、おれ知しやね。カア、カア」と飛んで行ってしまったど。ほんじやらば雀だべと思って、雀のところさ行つて、また同じこと言ったけあ、雀も、

「おれ、他人のものの取んね。チュンチュン」と行ってしまったど。ほんじやモグラだべと思ってモグラのところさ行つて同じこと言ったけあ、

「おれ、他人のものの取んね」と言ったど。そこさ、小ちつちやこいモグラが出てきて、

「ゆんべなの栗餅食いてえなあ」と言った。んだから、嘘がばれて殺さつちえしまったんだど。ほだから嘘はつかんねもんだど。

5 大阪の蛙と京都の蛙

話者 竹田憲士
採集 高橋礼子

(川西町大舟)

むかしむかし、大阪に住ん^{びつ}でた蛙と京都に住ん^{びつ}でた蛙이었다ど。

大阪に住ん^{びつ}でいる蛙は京都に行つてみたいと思ひ、京都の蛙は大阪を一ぺん行つて見てえもんだと思つていた。それで大阪の蛙も京都の蛙も、それじゃひとつ行つて見つかと、山へ登つたところ、自分の目玉、うしろさあんな忘れて、上の方見てみたど。京都の蛙は大阪見るつもりが京都見て、大阪の蛙は京都見るつもりが大阪見てしまった。どつちの蛙も何あんだ、大阪も京都も大した変^{かわ}んねなあと思つて、京都と大阪さ歸つたど。

6 十二支ばなし

話者 島貫 (川西町下小松)
採集 山田富士子

十二支決め方^きした時、猫、ねずみとりしたったもんで、お釈迦さまに、そういう、いやしい（下賤な）者は入れらんねえて言わつちえ、ごしやがつちやもんだから、入っていないなだ。

7 小太きつね

話者 島貫 (川西町下小松)
採集 山田富士子

小太郎飴屋、毎日、小白川、手の子（飯豊町）さ飴売りに行つてだつたど。山越えつ時、「お稲荷さま、飴一つ呉^けんぞ」と言つて、毎日山さ放り投げて行つていたもんだつたど。

ある晩げ、帰つて来たら、立派な祝言の座敷さ招ばつちえ、
「こつちさ来てごえ（来て下さい）」て、言つちえ、酒付きで一杯御馳走になつて、

お土産までもらって来たなだど。帰って来て見つど、立派な苞つとコは本物だったそうだ。

8 四本目の犬の足

話者 山田れい子
採集 山田富士子

(川西町大塚)

むかし、むかし、ヨントクさんがいました。そのヨントクさんというのは、四本足で、すばらしく立派なヨントクさんでした。

そこに、不幸にも三本足の犬がびよこたん、びよこたんやって来たので、「これこれ犬よ、その足はどうした」

犬は涙を流して、自分の身の不幸を話した。それでは気の毒だと、ヨントクさんは、「私の足を一本差し上げましょう」。犬は大へん喜んでヨントクさんの足を一本いただいた。唯でいただいては悪いと、足一本いただいたお礼に、名前を一つ足して上げようというので、三本足でゴトクさんとなった。犬はせっかくヨン

トクさんにいただいた足だから、オシッコするとき、足にかけては悪いと、足を上げてゐるのです。

9 虎 猫

話者 梅津きくみ
採集 梅津紀子
(米沢市古志田)

島川（米沢市築沢）の権助つう家で、虎猫飼つてだったど。そしてその虎猫、お正月のとき、魚やきしたたば、そいつ盗つたんだど。そうしつど、その家のじじ、怒つて、ぶん殴ぐつたば、流し（台所）の落口から逃げでつたど。

そして一週間ぐらい経つたば、じじ、便所さいだば、その猫、ニャーニャーて来たんだど。

「何だ、まだ来しやがつたが」て、じゃみだば（がみがみ言つたら）、それから影も姿も見えなくなつたど。

何年経つてからだか、じじ死んだど。葬式の日、すごくまっ暗にくもつて来た

んだど。そうしたけば、和尚さま、お経詠んでつき、誰も何もしないげんども棺のふたがガバーツと開いただけど。そして上の方さ吊しあがつたど。その和尚さま名僧だったほどに、

「とらや、とらや、棺おろせ、とらやとらや、棺おろせ」て、お経詠んだげば、棺のふた落ちて、パーツと明るくなって、とどこおりなく葬式はすませたど。

そして一回忌るとき、死んだじじの娘、おぼこ歩かせて、招ばつちえ来たど。そしたば途中でカラツと晴れた空、まっ暗になつたど。そしたばおぼこ、

「かあちゃん、おつかね、おつかね」て言うけど。

「何、恐つかねごんだ、雨降つど悪^{わる}りから、早く行くごんだはあ」て言うげんども、おぼこ、まあだ、「おつかね、おつかね」て言うけど。そしたば、今までよりまっ暗になつて何も見えねくて、おぼこ、「おつかね……」て泣き泣きさらわつちえつたど。家さ来て、大さわぎになつて、あつちこつち探したけば、ユウジングラつう沢んどこに、太い枯木さ着物だけ引つかかつてだけど。そしてそさ行つてみだば、その木の下に、草履、ちゃんと脱がつて、おぼこいねがつたど。猫股に食わつ

ちやつうごだべな。んだからお年取りに猫ざあ、しえめねもんだど。その家の流しは、水の落口はあっけんども、さっぱし水流んにえど、みなしみ込んで行くなだど。猫知ってんなだべがな。それからその家では虎猫飼わねぐなつたど。

10 花 咲 か 爺

話者 井上ムツ子
採集 井上礼子
(川西町中小松) 母

むかしあるどこさ、花咲かじじいと言われる、やさしいおじいさんが住んでいたど。枯れ木にきれいな桜の花を咲かせるという噂をきいて、あるところのお殿さまが、そこさござったんだど。

「枯れ木に桜の花を咲がせる花咲かじじいとは、お前のことか」って聞かれたもんだから、花咲かじじいは、

「はい、私が花咲かじじいと申します」と言っただど。そしてお殿さまから、「どれ、その枯木さ桜の花を咲かせてみる」と言わっただだど。花咲かじじいは

「はい」といって枯木にのぼって行つて、灰をまきながらこう言つたけど。

チチンブンブン

コガネサラリン

チチラポパリン

そうしたらば、見事な桜の花が咲いだけど。そしてお殿さまはたいそう喜んでごほうびをいっぱい花咲かじいさんさ与えになつたんだど。それを見つだつた隣の意地悪じじいが、うらやましがつて、

「お殿さま、私も枯れ木に花を咲かせることができます。あしたもここにお出になつて下さい」と言つたんだど。

チチンブンブン

コガネサラリン

チチラポパリン

ほだげんども枯れ木にはさっぱり花など咲がねで、お殿さまの目さ灰が入つたんだど。そしてお供の人に意地悪じじいは捕えらつちやんだど。ほだから欲ふか

いごどじゃさんにえもんだど。とーびんと、さんすけ眼まなぐに毛がはえて、けっけつ毛抜きで抜いければ、めんめんめっこになりました。

11 瓜 姫 子

話者 安部芳雄
採集 安部富美子

(米沢市木和田)

むかしむかし、天邪鬼というすぐねたみの深い娘がいたたど。またあるどごさ瓜姫子ていう、すぐくやさしい、機織りの上手な娘いだっけど。

ある日、天邪鬼は瓜姫子が村中で評判ええもんで、

「おれも瓜姫子のようになって、瓜姫子の家さ住んでみてえもんだ」
と思つて、天邪鬼は瓜姫子のどこ、

「山さ遊びに行つてみる」て、誘つて連つちえつたど。そしたけりや、天邪鬼は瓜姫子んどこ、着物全部脱がせて木さ縛つて、天邪鬼は脱がせた着物を着て、瓜姫子の姿して、瓜姫子の家さ帰つて行つたど。帰つてすぐ、機織りすっからつて、

言つて、機織りやつてみたところが、傷ものばかり作つたんだ。家の人達も、「ずいぶん傷ものばかり作るもんだ」つて思つていただつたけど。

天邪鬼が機織りしていつど、窓のどこさ鳥が飛んできて、

瓜姫子の機、天邪鬼ぶんどつた

て鳴くもんで、家の人も「変なこと鳴くもんだ」て思つていただつた。そんな何回も「瓜姫子の機、天邪鬼ぶんどつた」ていうもんで、「おかしいなあ」て思つて、瓜姫子の好きなトコロでいういも、山から掘つて来て食わせだ。そしたけりや、瓜姫子はちゃんと毛をむしつて、皮んどこ剥いて食うんだげんども何だべ、今日はただがむがむ食うもんだ」つて思つていただ。そして、

「毛ぐらい剥いで食え」て言うたら、偽瓜姫子は「毛は毛のくすり」て言つて食うのだ。

「んじゃ、皮ぐらい剥いて食つたら、ええべ」て言うど、

「皮は皮のくすり」て言い返すんだ。

「どうもおかしいもんだ」て思つていただけりや、また鳥がきて、前みだく（前の

ように) 鳴くもんで、家の人たちは、その鳥の戻って行くどこ追っかけて山の中さ入って行つたけりや、どこがらが「しくしく」って泣く声聞えんなだど。そこさ行つてみつど、瓜姫子のはだかで縛らうちえ泣いていたんだけど。うちの人たちはびつくりして、なんでここさ居たか聞いてみつど、天邪鬼に着物はがうちえ、しばらうちや事話したど。

そして、瓜姫子を家さ連^つちえ行つて、村中さ天邪鬼のこと言つてやつたけりや、村中の人たちが、

「とんでもねえ、娘だ。殺してくれる」て言うて、天邪鬼んどこ縄で縛つて引ずつて行つたど。そして、その頃、ソバ畑が刈らつじやばかりだつたど。天邪鬼はその畑の上を血をたらしながら引っぱらうちえ殺さつちやもんで、ソバの根っこは赤くなつてゐるもんだど。だから並の人と違うごとすつど、天邪鬼つて言われはじめだんでないべがなあ。

12 瓜子姫

話者 (高畠町露藤)
採集 今井加代子

むかし、瓜子姫とおじいさんとおばあさんが住んでいました。それはそれは瓜子姫をかわいがって仲よく暮らしていました。おじいさんとおばあさんは仕事に出かけるときに瓜子姫に言いました。

「瓜子姫や、誰か来ても決して戸をあけるなよ」

そうして仕事にでかけて行きました。瓜子姫は一人になると機織りをはじめました。しばらくすると、トントンと戸を叩いて、

「戸をあけてください」という声がします。瓜子姫は、

「誰がきても決して戸を開けるなと言われています」と言いました。それでもまたトントン「戸をあけて下さい」と何度も続きます。

トントン、「少しでいいですから開けて下さい」トントン「ほんのすこし」。あまり言うので、瓜子姫は機から降りて、ほんの少し開けました。(二部欠)

おじいさんとおばあさんが帰ってきてみると家の中には瓜子姫は居ず、探して

みると家の後の柿の木に瓜子姫が縛られて吊るされていましたとき。

13 笠 地 蔵

話者 井上ムツ子
採集 井上礼子
(川西町中小松) 母

むかしむかし、おじいさんとおばあさんが住んでただけど。おじいさんとおばあさんは、蓑と笠を作って、貧しい暮しをしたたけど。

雪の降る寒じる年とりの日に、おじいさんは町さ蓑と笠売りに行ったたけど。んだげんどさつぱり売んにやえもんで、帰ってくる途中さ、地藏さま、裸つぶりで立っていやったたけど。おじいさん、お地藏さまを、もごせ（かわいそう）と思つて、売るはずの蓑と笠を着せてやったら、蓑と笠一つ足んにえもんだから、自分の蓑と笠も脱いで全部のお地藏さまさ着せてやったたけど。そして静かに家さ帰って行ったたけど。家ではおばあさんが、おじいさん、赤い魚や白い餅買って来つかと思つて楽しみに待っていたどこさ、おじいさん帰つてきたたど。そしておばあ

さんさ、

「ばば、ばば、今日は地藏さま、裸つぶりでいたけもんだけがら、笠も売んにえがったし、蓑と笠着せで来たんだ。まず今日は何にもねえがら、早く寝っぺ」て言つて、二人で早く寝たど。

そしたら夜中に、どこがらが、

「じじ家はどこだ、ばば家はどこだ、エンヤラヤー、エンヤラヤー」て聞えてきたんだど。そいつがだんだんと近くなつて、おじいさんとおばあさん、恐つかなくなつて、ひと塊りになつて寝たつたど。それから、すぐ家の傍で聞えてきて、
「じじ家はここだが、ばば家はここだか」

ドスンともものすごい音したけど。いやあ、おじいさんとおばあさん、恐つかなくて恐つかなくて、明るくなんなばかり待つていだつたけど。そして明るくなつてから、表見てみたらば、家の前さ宝物だの、餅だの魚だの、それはそれはいっぱいあつたけど。そいつは地藏さま、雪の日のお札に来たんだど。ほだからお地藏さまじゃ大事にしんなねものだど。とーびんと、さんすけ眼に毛が生えて、

けっけつ毛抜きで抜いたれば、めんめんめつこになりました。

14 三枚のお札

話者 浜田のり
採集 村田友子

(川西町上小松)

むかしむかし、あるどこさ和尚さまと小僧いだっけど。

天氣があんまりええもんで、小僧は和尚さまさ、

「山さ花摘みに行かせて呉ろ」と頼んだど。んだげんども和尚さまは、

「そがに遠くさ一人でやらんにえ」と言っただけ。んだげんども小僧は、

「こがに天氣ええもの、ええこで」と、一生けんめい頼んだもんだから、和尚さ

まは、

「んじや仕方ないごで。んだげんども何かあつか分んねがら、このお札三枚やつから、危なくなったら『大川出ろ』と言って、この札投げろ。すつど大川出つから。この札は『火の山出ろ』と言って投げつど火の山出つから、そしてこの札は

『針の山出ろ』と言って投げっど針の山出っから、このお札持って行げ^ん』と言ってあずけたど。

小僧は喜んで山さ花摘みに行つたど。山さ行ったら、いっぱい花あつたもんで時間経^たつな忘つて花摘みしつたつたど。そしたら後の方から、

「小僧待てえ、小僧待てえ」と、鬼婆が追っかけてきたつけど。魂消た小僧は持^たつてだ花投げて逃げだど。一生けんめい逃げだけど。鬼婆は走んな早くてつかまりそうになつたけど。んだもんだから、和尚さまに言わつじやこと思ひ出して、「大川でろ」と言ってお札投げだど。そしたら小僧の後さ大きい川出だつけど。んだげんど、鬼婆はその川の水全部のんでまた追っかけて来たど。小僧は一生けんめい逃げたげんども鬼婆早くて、またつかまりそうになつたけど。んだもんだから小僧はこんどは、「火の山出ろ」と言ってお札投げだど。火の山出たど。そしたらさつき飲んだ水で火を消し消し鬼婆は山登つてきたつけど。そしてまた小僧つかまりそうになつたもんだから、「針の山出ろ」と言つて最後のお札投げたらば、針の山出だつけど。鬼婆はあっちこっちから血出しだし登つてきたつけど。その間

にやつと小僧はお寺さ帰ったど。鬼婆はお寺の中までは入ってこらにえもんだからあきらめて帰ったど。和尚さまは、「んだから遠い^とどこさ、一人で行ったりさんにえもんだ」と言っただけ。

15 三枚のお札

話者 安部芳雄
採集 安部富美子

(米沢市木和田)

むかし、ある寺さ、とっても小^ちつちやくてめんごい小僧っこいだけど。和尚さまに、

「お前、山のうらのうらの部落さいって、お経上げて来て呉ろ」って言わちやもんで小僧は「はい」て言って、小^ちつちやいワラジ履いでいると、和尚さまは、「ちよつと待て、このお札三枚呉つちえやつから、途中で殺されそうなことに出会ったら、一枚ぶん投げて逃げろ、そして三枚ぶん投げっど、助かって帰って来られっから」て、お札を三枚ふところさ入^えって出でいったど。そしてずっとずっ

と歩いて行くげんども、あたりは真つ暗くなつて、

「寺さも帰らんねし、部落さも着かねし、困つたもんだ」と思つていっど、遠くさ灯りがちらちらつて見えるもんで、

「あつ、あそこの家さ泊めてもらおう」と思つて、

「こんばんは、今晚ここに泊めてください」て言うど、中からすごいガラガラ声で、ばばが、「ああ、入つてこい！」て言うもんで入つて行つて、火の傍さ行つてみっど、そのばばはすごい顔した鬼婆だつたど。小僧は、「こりや、恐つかねばばんどこさ来たもんだ」て思つていだら、鬼婆は台所さ行つて、何かとぎ始めたど。

小僧はなんだと思つてちつと戸を開けて見っど、大きい出刃包丁をとぎ方して、「いい、うまそうな小僧来たもんだ。あいつを煮て食つたらなんぼかうまいべな」て、言つてだっけど。そして、大きな鍋さお湯わかしていだつたけど。小僧は賢いもんで考えたど。

「おれ、便所さ行きたくなつたから、便所貸してください」て言うど、ばばは、「待つてろ」言つて、小僧の腰さひもつけて便所さやつたど。ちつとすつど、「小

僧まだか」て言うど、小僧は小^ちつちやい声で「まだだっし」て言うなだど。そして腰のひもぐいぐいって引っぱんなだど。何回もばばが言ううちに小僧はそとひもをはずして便所のとつてき縛^{くわ}って、バンバン逃げて行つたど。そしてばばはまた「まだか」て、ひも引っぱたら、把手のひも引っぱらつちえ、バダンバダンて音するもんだから、ばばは、「あつ、あの小僧逃げて行つた」て言つて、小僧んどこ、どんどん追っかけで行つたど。小僧はあんまり小^ちつちやいもんで、なんぼ走つても、ばばに追っかけらつちやなだど。小僧はお札のこと思ひ出して、その一枚を「大^おつけ、大つけ山できろ」て言うて投げつど、ばばと小僧の間さ、大つけ大つけ山できだんだど。んだげんども、ばばは、

「こがな山、すぐ押されっぺちえ」て言つて、どんどん登つて、また小僧んどこさ追っかけて来んなだど。んだもんで、こんどは二枚目のおふだを出して、
「大^おつけ大つけ川できろ」て言つて投げつと、また小僧のうしろさ大つけ川出きだど。そんじえも、ばばは着物の裾をたぐり上げて、

「こがな川すぐに渡られんべちえ」て言つて、ザブザブと漕いで、また小僧さ追つ

かけて来たど。

小僧、これが最後のお札だと思つて、「火が点いて、どんどん、どんどん燃えろ」つて言つてお札投げつど、そこの原っぱがボンボン燃えて来たど。そしたけりや、ばばは焼けて死んでしまつたど。んだからその小僧は、後は何にも無くお経上げて、寺さ帰つて来たもんだけど。んだからお札じゃ大事にするもんだ。

16 地蔵浄土

話者 井上ムツ子
採集 飯沢紀子

(川西町中小松)

むかしむかしよ、おばあさん掃除しつたらば、お供えしつた団子がコロコロつて、転がつて行ぐんだじも。おばあさん、団子追っかけて、

だんごどの だんごどの

どこまでござる

て聞いたど。そしたらば、団子、

大坂、境の、地藏の前まで

て、二・三回言つて、ねずみの穴さ入っていったじも。おばあさんも一緒になつて入って行つてみたらば、お地藏さまの前さ転がつて行つたじも。

「お地藏さま、お地藏さま、団子転がつて来ねがつたべか」て聞いだらばお地藏さま、

「おれ、腹へったもんだから、御馳走なつたぜは」て言つたじも。

「んじや、ええげんどもよ」て、おばあさん言つたげんどもよ、お地藏さま、

「おれ、食つた。お礼に今日の晩、おれの前で鬼いっぱい来て、札勘定するから、おれの後さ隠つて、へコケコエロー」て、三回鳴いでみる」て教えだじも。

お地藏さまのかげさ隠つてだらば、鬼いっぱい来て、札勘定すんなだじも。おばあさん教えらつちや通り、「コケコエロー」て一回鳴いだじも。そしたらば鬼、「一番鶏鳴いたから、早く勘定すつて」て言つたど。そしておばあさんまた鳴いたど。

「これこれ、二番鶏鳴いだから、早くすつて」て言うたど。おばあさん、また鳴

いたど。そしたらば、鬼明るくなんだと思つて、札担いでわらわら逃げでつたど。そしてお地藏さま全部その札、おばあさんさ呉っちゃど。ほだからお地藏さまじゃ大切にしんなねもんだど。とーびんと、さんすけ眼に毛が生えで、けっけつ毛抜きで抜いたれば、めんめんめっこになりました。

17 地 蔵 淨 土

話者 色摩清見
採集 清水節子

(米沢市塩井)

むかし、じじとばばがいたつけど。じじは山さ柴刈りに行つていた。ばばはじじの弁当に団子をもつて来たど。そうしたら一つだけ転がつていたど。ばばは団子どの、団子どのと言つて追っかけて行つたど。そして穴さ入つて行つて、お地藏さんの前で止まつたど。あんまりうまそうなので、食べてしまった後で、ばばがきて、あらあら、じじさ食せつかと思つて作つた団子だったんだと言つた。お札返しすつから、今晚おれのうしろさ隠れていろ、山賊がここに来てバクチをす

る。三時^{とき}になると帰ってから、頃合いを見て、ばば、鶏の真似しろ。そう言った。

ばばは地藏さんに言われたとおりに、コケコッコーと一回鳴いた。山賊たちは「今日はなんだか早く鳴くなあ」と言っていた。

こんどは二回、コケコッコーコケコッコーと鳴いた。そして三回、コケコッコー、コケコッコー、コケコッコーと鳴いたのを聞いて、明るくなって人に見つかつたと悪いから早く逃げて行つた。宝を置いて行つたので、ばばはそれをもらつて来て、裕福に暮らしたど。

18 猫 と 南 瓜

話者 佐々木
採集 高野美喜子
(米沢市峠)

むかし、猫が好きで好きでたまらないじじがいたつたんだど。そこではブチ猫で「ブッコ」という名前の猫を飼っていたんだど。

ある日、じじが囲炉裡ばたで背中をあぶっていると、うしろでことつことつと

いう音がしたんだ。振り返ってみると、ブッコが戸棚の戸あけて盗食^{ぬすく}らいをしていたんだ。んだもんだから、じじが「ブッコ、お前、盗食らいしたなが」て言っただ。そしたら、ブッコは何を思ったか、じじの背中を思い切りかちやいで逃げて行っただ。じじはあがに可愛がっていたのに、なんでこがなことすんだべと言つて、すごく怒っただ。

そしてブッコを殺して土堤に捨ててしまったんだ。

春になって、種子も埋めない土堤から南瓜が出てきたんだ。村の者は不思議がつて、そこを掘つてみたんだ。そしたら南瓜の芽はブッコの目から出ていたんだ。それでブッコを神おろしにかけてみたんだ。ブッコの言うには、

「じじは、おれが戸棚を開けて盗食らいをしていたのを怒ったので、じじの背中をかつちやいたら、おれを殺したので、南瓜に化けて、じじに食べさせ殺そうと思っただ」と言っただ。

だから猫はいくらかわいがつても魔物だというんだ。

19 猿 賀 入

話者 安部芳雄
採集 安部富美子
(米沢市木和田)

むかしよ、猿が人間の嫁欲しいて言うのがいだったもんだど。

ある年、すごい水不足で、ある家の親父が毎日水引きすんなだげんども、さつぱし水が田さ掛んねなだど。

「困ったもんだなあ」て思っていたどこさ猿が来て、

「おれが水引いて来て呉^けつから、おれのいうごと何でも聞^きつか」て言^いつたど。その親父は、

「猿が食^くうものでも欲しがんなだべ」て思^{おも}つて、

「何でも聞^きつから水引いで呉^けろ」て言^いうたけりや、猿はみるみるうちに水集めて田さ引いて呉^けつちやど。そしてその田はその年はすこくええぐ出来^きたんだど。猿は、

「んじゃ、おれの言うごと聞^きいでけろ、おれさ、お前の娘の一人でええから、嫁さ呉^けろ」て言^いうたど。

親父はたまげたげんども約束だったし、家さは娘三人も居っからと思つて、家さ歸つて行つたど。んだげんども、どうしようもなくて何にも食わねで寝つだけりや、一番上の娘が、

「とうちゃん、何で御飯食わねなや、どごが悪^われなが」て言うもんで、

「どこも悪くなえげんども、おれの言うごと聞いてくれつと食われる」ていうもんで、親父は、

「お前、猿の嫁になつて呉^けんにえが」ていうつたら、娘はごしやえで、

「なんで人間がさるの嫁になんなねごんだ、食わねでろ」て、ごしやえで出でつたど。まだちつと経^たつて二番目の娘が、

「とうちゃん、何で飯食わねごんだ。どこか悪れなが」て言うもんで、

「こういうわけで食わんにえなだ」ていうど、娘は、

「ほんとに馬鹿にしてつこど」て、馬鹿にした顔して出でつてしまつたど。親父は、

「みな娘に、ことわられつべし、どうしたらええもんだべな」て思つていただけりや、

一番下の娘が来て、

「なんで飯食わねごんだ」て来たもんで、「こういうわけで…」て話してやったけりや、

「ああ、ええごんだ、おれがその嫁になつてけつから、とうちゃん、飯食つて呉ろ」ていうもんで、親父は安泰して、飯何杯も食つたど。

ある日、猿はちゃんとカミシモをつけて、その娘のどこさやつて来たど。娘もちゃんと花嫁の姿して、いだったけど。猿はその娘んどこ連つちえ、山の中さ帰つて行つたど。そこの猿の家では、今日はめでたいからつて、餅搗きはじまつたど。そしたけりや、娘は猿に、

「ああ、おら家のとうちゃんも、餅大好きだったげんども、とうとう餅搗かねで来てしまったなあ」て言うたけあ、猿は、

「んじや、楓の葉っぱさでも包んで持つてつてくろ」て言つたど。娘は、

「おら家のとうちゃん、草の匂いすつど食わんにえなよ」

「んじや、藁の苞つとこさ入つちえ持つて行げ」て言つたど。娘は、

「おらえのとうちゃん、苞こさ入っちゃ、餅食わんにえなよ」て言うど、
「んじゃ困ったもんだなあ、仕方ないがら、臼がらみ持ってて呉^けつか」

「それだったら、とうちゃんも喜んで食うべ」て言うたど。そして猿は、その臼を背中さ背負って親父のうちさ向って行つたど。行ぐうちに大つきい川があつたど。そしたら、娘が、

「ああ、とうちゃん、あの花大好きだったんだ。取ってて呉^けっちゃら、なんぼ喜ぶんだがなあ」ていうていると、猿は、

「んじゃ、とって呉^けつかから」て、臼を降ろそうとしたど。そうすつど娘は、

「あつ、とうちゃん、餅、土くさぐなつど食わんにえなよ」ていうど、猿は、

「んじゃ仕方ねえがら、背負って登つこではあ」て言うて木さ登つたど。そして「この木が」て言うど、娘は、

「もう少し先の方のあの花」て言つて、だんだんと先の方さ猿んどこやって、ちようど川の一番深いどこの上辺りさ来た時、「そこの花だ！」て言うたもんで、猿はその木をとってやつど思つたけりや、川の深いどこさジャボンて入つてしまい、

臼背負ったままだったもんで、ズブズブ沈みながら、流っちえ行つて、「助けてくれ」て、猿は叫ぶげんど、娘は、「今のうちだ」と思つてわらわら家さ歸つて行つてしまつたど。そしてその娘は猿の財産全部もらつて、家さ戻つたど。二人の姉たちはそれを見て、「おれが猿の嫁になつとええがつた」て、ねたんだったもんだど。

20 猿 聲 入

話者 勝見花子
採集 田村美代子

(川西町犬川)

むかしむかし、山の中におじいさんが住んでいたつけど。おじいさんには三人の娘がいたつけど。おじいさんが山さ行つて薪をとつてるうちに、足をすべらして谷川に落ちそうになつたど。そしたらそこさ、猿がやつて来て、おじいさんを助けて呉つちやんだど。お礼しつからと言つて、三人の娘のうち一人を嫁さやつからといったど。そしたら猿は喜んで、次の日、さっそくやつて来たなだど。お

じいさんは娘たちに、その話をしたら、一番目の娘も二番目の娘も嫌^やんだつてこ
とわったんだど。ほだもんだから、おじいさんは猿にあうのがいやで、寝^やった振
りし^やつたど。そしたら三番目の娘が、おれが行^やつて呉^やつからと言^やつたど。そして、
猿のお嫁さんにな^やつたんだど。

嫁^やさ行^やつて、初めての節句^やがやつて来^やたんだど。おじいさんに餅^や持つて行^やがん
なねとい^やつて、二人で餅^や搗^やきしたんだど。猿は重箱^やを出^やして来^やて、これ^やさもつて
行^やくべとい^やつたげんども、嫁^やはおじいさんは重箱^やの匂^やいが嫌^やいだからとい^やつたら、
ほじやらばとい^やつて、鉢^やを出^やしてきたんだど。ほだげんども、嫁^やはおじいさんは
鉢^やは鉢^やくさいの嫌^やいだそ、とい^やつたんだど。嫁^やは餅^やは入^やつちやまんま、臼^やごと背^や
負^やつて行^やつたらいいんでねえがと言^やつたど。猿は喜^やんで、ほだほだと言^やつて、背^や
負^やつて行^やつたど。二人で川端^やを歩^やい^やつたら、山の上^やさきれいな花^やが咲^やいていたつ
けど。嫁^やは猿にとつてけろと言^やつたら、猿は喜^やんで取^やつてけろとい^やつて、臼^やを降^や
ろそうとし^やたど。嫁^やは下に降^やろすと、臼^やさ土^やがつつから、そのまま背^や負^やつて取^や
つてけろとい^やつたど。猿は言^やわれたまま、臼^やを背^や負^やつて登^やつてい^やつたど。猿はこれ

か、これかと聞くけれども、嫁は、ほんね、もつと上、もつと上と言って、とうてつぺんまで登って行つたど。そしたらその木がおれて、猿は臼がらみ谷底に落ちて行つたど。そして嫁はさっさと走って家に帰って行つたど。

21 地蔵浄土

話者 佐藤ふみ
採集 佐藤しげ子
(川西町) 母

むかしむかし、仲のよい、気持ちのやさしい、おじいさんとおばあさんがありました。おばあさんが庭をはいていると大きな団子が転んで来ました。ころころと転んで土の穴に入ってしまった。

「おじいさん、おじいさん、団子がこの穴から落ちて行きましたよ」と、おじいさんと呼んでいました。

「どれどれ」と、おじいさんは団子を拾いに穴に入っていました。団子はまたころころと転んでいきました。

「団子さん、団子さん、どこまでござる、どこまでござる」と追っかけましたが、見失ってしまいました。お地藏さんが立っていました。

「お地藏さん、お地藏さん、団子が転んできませんでしたか」と聞きました。お地藏さんはにこにこして、そっちの方に行きましたよと指さして教えました。団子はやっぱりありました。

「お地藏さん、団子がありましたよ」と、気のやさしいおじいさんは、汚れたところは自分が食べて、あとはお地藏さんに食べさせました。お地藏さんの傍で衣服しながらいろいろと話をしました。お地藏さまは言いました。

「おじいさん、私のひざに上りなさい」

「いいえ、もつたいない、お地藏さんのひざになど上がれません」と言うと、いから上がリなさい。と言います。今度は腹の上に上がリなさいと言います。おじいさんはもつたいないからという、いいからと、上がリなさいと言います。今度は肩に、今度は頭にと、もつたいがるおじいさんを頭の上に上げて言いました。

「ずうっと東の方を見なさい。大きなヤカタが見えるでしょう。あのヤカタに、夜になってたくさん鬼共が集まって、バクチを始めます。一晩中バクチをする、朝三番鶏が鳴くのを合図にみな帰って行きます。あなたが行って、鶏のまねをしてみなさい」と教えました。おじいさんはお地藏さんの言うとおりにそのヤカタに行ってみました。そして屋根裏に上って見ていました。夕方になりました。赤鬼・青鬼、大きい、小さい、こわい顔をした鬼共がたくさん集まって来ました。おじいさんはこわくなって、ガタガタしていました。

まもなくバクチが始まり、金のやりとりが始まりました。おじいさんはこわごと、「コケコッコー」といいました。鬼共は「一番鶏が鳴いたぞ、少し早いようだな」と言いながら、一生けんめいバクチです。おじいさんは少し間をおいてまた「コケコッコー」といいました。二番鶏が鳴いたぞ、それもう一息だ」と、見むきもしないで夢中にやっています。東の空がしらけた頃、おじいさんは、ひときわ大きく、「コケコッコー、コケコッコー」と言いました。鬼共はあわてて金も集めず、「勝負はあしたの晩だ」といって帰ってしまいました。おじいさんはこわ

ごわ屋根裏からおちて来て、その金を頂きました。お地蔵さんによくお礼をいつて帰って来ました。

となりに欲の深いおじいさんとおばあさんが住んでいました。ようし、おれも行つて金をとつてこようと思ひました。うまくもない団子を作つて転ばし、上れともいわないお地蔵さんの頭の上にあがり、

「あそこだ、あそこだ」と、走つて行きました。鬼どもがたくさん集まつて来ました。バクチが始まりました。おじいさんは目を光らせて、あの金を全部取つてやろうと思つていました。

にわたりのマネをしました。一回、二回はうまく行きました。三回目の「コケコッコー」は夜明けなのに、早く金がほしいので、早くに鳴いてしまいました。鬼共は少し変だぞと帰らないでさわぎはじめました。おじいさんはガタガタしてかくれていましたが、屋根裏から落ちてしまいました。鬼どもは「あのヤローだ。この前もおれたちの金をとつたのは、こらしめてやれ」と、てんでに着物をはいたり、なぐつたりでひどい目にあつて帰りました。それから悪いおじいさんも

よいおじいさんになりました。

22 食わず女房

話者 安部芳雄
採集 安部富美子

(米沢市木和田)

あるどき、すぐくケチな木こりがいたったけど。

そのきこりは、「働き者で食うもの、何にも食わね嫁欲しえ」と言っていたもんだった。そしたけりや、ある人がすぐく美しく、何にも食わね嫁連^つちえ来て呉^けつちやど。

「飯食え」て、木こりが言ってみっけんども、「結構だっし」て言って、いっこう食わねがったど。

「あんまり何も食わねべし、病氣にもなんねべし、おがしえな」て思っただけりや、ある日、隣の家の人が、木こりに、

「お前、とんだ嫁もらったもんだ、よつく見ててみろ」て言うもんで、木こりは

山さ仕事さ行くふりして、出ていって、そつと家の屋根さ登って破風から家の中見つたつたど。そうしたけりや、その嫁、大つけ釜さお湯わかして、それさ米いっぱい入っちえ、飯炊いたど。そして大つけヤキメシいっぱい握つたど。そしてけりや、頭ぶるぶるって振つたと思つたけりや、頭の髪の毛の中から、大つけ穴が出てきて、嫁の口は耳んどこまでさけでて、すごい鬼に變つたんだど。そして今作つたヤキメシをストン、ストンとその穴さ、いっぱい入っちえ、また髪の毛をきれいに結つて、また元の美しえ嫁にもどつて、鍋も飯もきれいにし始めたんだど。木こりは、

「こりや、すごい化けもの嫁さもらつたもんだ」と思つて、暗くなつてから仕事から歸つてきたふりして、「只今」ていつたど。

それから三日ぐらいしてから、木こりは何とかして追い出してやんなねど思つた末に、

「おれはもう年取ってしまったから、何だか知^しやねげんども、こわくて働らがんにえぐなつたから、お前もうつちや歸つてけるはあ」て言つたらば、嫁は、

「んじゃ、おれさ、空の桶一つ呉^くっちゃあけろ」て言っただ。木こりは何呉^くっちゃえやってもいいから、早くこの家から出でてもらいたいもんで、呉^くっじゃあ、それ背負^{おぶ}つ時、

「おれ、立たんにえから、起こして呉^けろ」て、嫁がいうもんで、木こりが起こして呉^けっちゃあど。そしたけりや、その起こして呉^くっちゃあ拍子に、木こりがその桶の中さ入ってしまったど。嫁はみるみるうちに鬼に變つてきて、

「お前、おれの正体見たから、追い出そうとしたんだべ。おれはお前んどこ食つてやる」て言つて、ドンドン、ドンドン山の中さ入つて行っただ。木こりは何とかして、此処から逃げたいもんだと思つて上の方見ていたけりや、丁度木がしだれていたとこがあつたけど。「今だ」と思つて、すつとその木の枝さくつついて、そして降りて逃げて行っただ。鬼は、

「お前、逃げる氣が、んじやお前んどこ、ここで食つて呉れる」て言つて追かけて来たど。木こりは、どうしたらええがんばと思つて走つて行つたけりや、丁度ドロドロつていう山の下沼みたいなどこさ来たけど。そしたけりや、そこさヨ

モギとショウブがいっぱい生えっだったけど。

「よし、ここさ隠れてやつぺ」と思つて隠くつちやど。そしたけりや、鬼は木こりのとこ見つけたげんども、その沼みたいなどこさ入って行くと、鬼の体は腐つちえしまうもんで、その沼みたいな周りをぐるぐるまわつて、木こりどこ食つてやつぺと思つていだったげんども、なんとしても捕えらんによえもんで、仕方なく山さ歸つて行つたど。そして木こりは助かつて、

「二度と何にも食わねくて、働く嫁ほしいなんて言うもんでねえ。普通の嫁もらうもんだ」と思つたど。

んだから、五月節句には屋根によもぎとしょうぶをさして、菖蒲酒のんで、菖蒲湯さ入るもんだど。むかしは女は鬼だつていだったもんだど。んだから男はよもぎと菖蒲をおいて、鬼みだいな女が来ねようにしたもんだど。

23 団

子

話者 佐藤ふみ
採集 佐藤しげ子

(川西町) 母

山奥に仲のよい働き者の夫婦が住んでいました。三つになる男の子と五つになる女の子と二人の子どももありました。春には畑に野菜を作り、兎や小鳥を取ったりして食べていましたから、何分自由なく子どもを育てて暮らしていました。寒い冬がやってきました。父親は大きなキジを取って来て、子どもたちに食べさせようと毛をむしたり、皮をはがしたりしていました。そこへ小さい姉弟がはしやぎながら、父の料理を待っていました。ところが大変、三つになる男の子があやまって父の使っていた小刀をのどに刺して死んでしまいました。鳥を食べようところじやなくなっていました。二人の親は泣き泣き、子どものなきがらを山に葬りに行きました。五つになる女の子を背負って、山の上に来たとき、空が真っ黒になって、おそろしい大きな鳥が背中の子をさらって行ってしまいました。父親も母親も気狂いのように、「子どもを返せ、子どもを返せ」と泣き叫びましたが、寒い冬の空にとび立った大きな鳥は二度と姿を見せませんでした。

二人は毎日毎日子どもたちのことを思い出して泣きあかしました。

春になっても二人は働く事も忘れて泣いていました。食べるものもなくなりました。住んでいる家もこわれました。二人は仕方なく乞食のようになって旅に出ました。ある日、二人は見知らぬ山道を歩いて行きました。どこまで行っても一本道で暗くなつて来たのに、雨も降つて来ました。なんとかして宿がほしいと思いました。すると向うにポツンと灯りが見えて来ました。二人は喜んで大急ぎでかけよつて一夜の宿を乞いました。その主人はおどろいて言いました。

「ここは、あなた方の来るところではありません。私の家は死んだ人に団子を作つて売るところです。朝くらいうちから、夜おそくまでたくさんの人が団子を買いに来ます。きっとあなたの子どもさんも来るでしょうから、泊まつて見て行きなさい」と、話を聞いた主人はやさしく言いました。二人は子どもたちに会える喜びで、夜も眠れませんでした。

朝となりました。山のように作つた団子が出されました。次から次と、たくさんの人がたくさん団子を買つて行きました。子どもたちはまだか、まだかと待つ

ていますが、なかなか来ませんでした。くらくらなって団子を買いに来る人もまばらになって、作った団子も、もう少しになりました。二人は気が気でなく、もう来ないではないかと、がっかりしていました。

すると、もうこれで最後かというとき、ボロボロの着物を着て、青い顔をして、二人の子どもが手をつないで、よちよちとやってきて、団子を三つ買いました。姉は自分が一つ、弟に一つ、そしてもう一つは、

「お前が後で団子が欲しいと泣くから」といって、紙に包んで弟のふところに入れてやりました。そしてまたよちよちと帰って行きました。二人の親は泣きながら、子どもの名を呼ぼうとしましたが、その主人に、ぜったい声を出してはいけないと言われました。変り果てた子どもの哀れな姿に、二人は泣き叫びたく思いました。主人はそんな二人に話しました。

「あなたたちは早く家に帰って、家を直し、畑を作り、仏を守りなさい。毎日毎日仏壇に温かい御飯とお茶を上げなさい。そうすればあなたの子どもたちもたくさんのお団子を買うようになりますよ、いい着物も着てきますよ」と、やさしくさ

としました。二人はその主人にお礼をいって自分の家にもどりました。そして前にもまして働きました。家も直しました。畑のものもよくとれました。四季毎にとれた畑のものを供え、温かい御飯も毎日仏さまに供えられるようになりました。子どもたちも毎日元気でたくさんのお団子を買いに来られるようになりました。

24 お糸 唐糸

話者 佐藤 斎藤操子
(川西町)

むかし、先妻の子のお糸という女おなこがいたんだ。そこさ新しいおつかが来て、その子どもが唐糸という女だったんだ。

そのおつかは、お糸どこを働かせてばかりいたんだ。そして意地悪ばかりして、めんごがんねがった。そして唐糸ばかりめんごがったんだ。んだげんど、唐糸は心やさしい女だった。

そのおつかと唐糸が映画見さ行った。そしてお糸には、米をといで御飯炊い

で用意しておけと言つて、出かけだんだど。そこさお糸の友だちが来て、「映画見さ行くべ」て言つたんだど。んだげんでも、お糸は、

「おれは、しんなねこといっぱいあるし、着物だて持つてね」て言つたんだど。

そしたらその友だちみんなが、お糸の仕事の米つきだの、米とぎだの、米炊いだりして手伝つて呉^けつちやんだど。んだげんどお糸は着ていく着物ねえもんで、本当のおつかの墓さ行つたんだど。そこには松の木が一本あつて、そこで、

「キンランドンスの着物とクツが欲しい」て、三回唱えだらば、その松の木伝わつて、着物の履物が天から落ちて来たんだど。それ着て映画さ出かけて行つたんだど。そして映画館では上の方に席をとつてまゝ母と唐糸がいだつたど。そしてお糸どこを見て、「ずい分お糸と似つたど」と思つたげんど、全然気付かねがつたんだど。お糸は唐糸たちより前に急いで帰つたんだど。そんな時、身分の高い人がお糸どこ見て、とっても気に入つて、是非嫁にしたいと思つたんだど。お糸は帰つどきあんまり急いだもんで、履物を片方落してしまつたんだど。その履物をその身分の高い人が拾つて、それを履く娘を探したんだど。とうとうお糸の

家さ来たど。おっかは唐糸さ履かせたげんど、その靴が小^ちつちやくてどうしても入んねもんで、おっかは唐糸の足の指を一本切つてまで、履かせようとしたげんど、やつぱり分んねがつたど。そして仕方なくお糸さ履かせたきあ、ぴつたり合つたんだど。んだもんでその身分の高い人は嫁にすつことにしたんだど。そして御祝儀の時、行かねばいいことに、そのおっかと足を血だらけにした唐糸は見に行つたんだど。そしたば、お糸が着つた立派な衣裳の模様の左肩の方の鳥がとんで行つて、おっかの目を口ばしでつついたんだど。そして右肩の方の鳥は唐糸の足の指をくつつけで呉^けつちちゃんだど。

25 お 糸 唐 糸

話者 佐藤ふみ
採集 佐藤しげ子

(川西町) 母

お糸は早く母を亡くしました。父にかわいがられて育ちました。

ある日、父に後目の母が来るようになりました。お糸は気持ちのいい娘で、よ

く二度目の母にもなりました。母は父との間に子どもが生まれました。唐糸と名づけて、そのかわいがり様はたとえようもないほどでした。唐糸もいい娘に育ちました。その頃から母はお糸を何につけ邪魔者にしました。父は毎日のように仕事の帰りに、かわいい二人の娘にお土産を買って来てくれました。母はその土産の品も唐糸一人なら、食べるものも着るものも、唐糸一人ならもつと多く、もつといいものを…と、いつも考えるようになり、何とかしてお糸を、無き者にしようと考えていました。今日は毒御飯を食べさせようと思いました。そして唐糸に言いました。

「今日、お姉さんの食べる御飯を食べてはいけませんよ」と言いました。お糸と唐糸は大変仲のよい姉おmoi、妹おmoiでした。唐糸は早速、姉のお糸に言いました。

「お姉さん、今日は御飯を食べていけません。後で御飯をもつて行ってあげるから」と、姉に言いました。お糸も唐糸の言うとおりにしました。母は今度は別のことを考えました。お糸を何か重いものでつぶしてしまえと思いました。お糸の部屋

に重い臼を上げ、それを落ちるしかけをしました。唐糸は母のすることを見抜いていました。姉に、「今夜は私の部屋にきて寝るように」といって、お糸の床の中には、お椀に水を入れて布団をかけておきました。母はそれとも知らず、夜中に大きな臼をお糸の床をめがけて落しました。ピチャンという音がしたのでまずは成功したと思って安心して寝ました。

朝、母は、「唐糸、ごはんですよ」というと、「はい」と二人一緒に起きてきました。母は今度こそはと、箱に入れて生き埋めにすることを考えました。母のすきを見て、箱に穴をたくさんあけました。そして姉に言いました。

「姉さん、このケシの花の種子をこの穴からずうつと蒔いて下さい。そしてこの穴から、なるべく息をつくように必ず助けに参ります。決して母にはさからわぬように」と、よくよく約束しました。姉は唐糸の言う通りにしました。母はその箱を若者に、山に埋めるように言いつけました。ケシの芽が出ました。唐糸はその芽をたよりに山に行きました。そのまわりはたくさんケシの芽が出ていました。唐糸は此処だとばかり掘りはじめました。なかなか掘り出すことができません。

泣いていると、山から見知らぬおじいさんが出てきて、お糸の箱を掘り出してくれました。

「お姉さん、お姉さん、唐糸だよ」と言うと、小さな声で「はい」という声が聞えました。箱から出てきました。姉は見られないほどやせていました。唐糸は家から持ってきた食べものを食べさせ、家に帰れば、また母にいじめられるに違いないから、二人でとなりの里さ行くことになりました。二人は手をつないで、隣の里に来ました。そして大家の女中になり、一生けんめい働きました。一人は子守り、一人は勝手（台所）の仕事にとかげひなたなく働き、主人には可愛がられていました。

こちらでは、お糸も唐糸もいなくなり、父は氣狂いのようになり泣き暮しているうちに盲目になりました。そして鉦かねをならして子どもを探しに歩きました。

お糸 唐糸 いたならば

この目はばつちり開くだろう

チリン チリン

と、里から里へと歩きました。ある日、お糸と唐糸のいる里にもやってきました。子守りしていた唐糸はその鉦の音を聞きました。唐糸は姉のお糸を呼びました。もしや父ではないかと二人でかけ寄りました。お糸は「お父さん」と抱きつきました。片方の目がぱっちり開きました。唐糸も「お父さん」と言って抱きつきました。そうしたらもう片方の目もぱっちり開きました。三人は抱き合ったまま喜びあつて泣きました。

三人は母のいる家にもどつて来ました。家に帰つて見ると、母はモグラになっていました。子どもたちは「お母さん」というと、星になってしまいました。父はお日さまになって、子どもたちの後を追つて空に上りました。

26

ゆうばりとかがみ

話者 佐藤
採集 斎藤操子

(川西町)

ゆうばりとかがみという姉妹がいだっけど。ゆうばりは先妻の子どもで、身成なりが小つちやくて、細こい娘だったど。かがみは今のおかちやの子どもだったど。そしておかちやは病気で寝っだったど。そして、

「莓食いだい」て言っただ。んだげんども、そんどきは莓がある時ではねがったど。んだげんども、二人の娘は食わせてあげたいと思つて探しに行っただ。ゆうばりはずつと行つて広い原っぱさ出たど。ゆうばりは心がやさしがったもんで、自分のクシで池の水で、その髪のをきれいにしつてけつちえ、服も洗つて呉けつちやりして、きれいな身なりにして呉つちやど。そしてゆうばりは、また少しいくと莓がいっぱいあつたんだど。大喜びでそれをとつて、おかちやさ持つていつてやつたんだど。それを見て、かがみはおれもとつてきて、おかちやさんなねと思つて、その莓がいっぱいあつとこさ、行つたんだど。その途中またあの氣持わるいのが出てきたど。かがみは、

「うう、氣持悪い、氣持悪い」て言つて川の中さ、蹴つとばしてやったんだど。そしたらその変なものは、

「ゆうばりは立派な人の嫁になる、そして幸せになる。んだげんど、かがみは下駄の齒入れの嫁になつて、不幸になる」て、つぶやいたど。そしたきや、その変なものという通りになつたど。んだから、なんじよな変なものにも親切にしてやんなねなだ。

27 まま子いじめ

話者 (高畠町露藤)
採集 今井加代子

あるところに、三人の娘がいました。母親は娘のことを、先妻の子どもなのでよく思つていないで、何かと意地悪するのです。

あるとき、父親が仕事で出かけたすきに、娘たちに仕事をいつけました。一人の娘には風呂に水を入れるように言いました。次の娘には木を切るようにいい

ました。それぞれ、ざるで水をすくい、大きな丸太棒をへうで切ってくるように
いました。

残った娘には風呂を焚くように言いました。それでも娘たちはやつのことで
風呂に水を入れ、それに火をつけ木を切りました。母親は風呂を煮立て、その上
に丸太棒を渡しました。そしてその上を一人ずつ渡らせようとなりました。娘たち
は次々に煮立つ湯の中へ落ちました。

しばらくして父が帰ってきました。父は娘のいないのを不思議がりました。ふ
と風呂をみると、娘たちが湯の中で死んでいました。

28 にんじん角とこんにやく舌^{べろ}

話者 安部富吉（米沢市木和田）
採集 安部富美子

むかしむかし、意地の悪れお姑^わばがいだったけど。嫁んどこ憎くて憎くて、
何とかして嫁んどこ、この家がら出してやっぺと思っていだんだげんども、追い

出してやつことさんにえくて居だつたど。

ある夜中だつたげんども、嫁が便所さ行ぐど、お化けがすうつと出て来んなだど。「おつかねえ、助けて呉ろ」って言つて亭主んどこ起こして、そこさ連つて行つてみだげんども出て来ねがつたど。それから毎晩のようにお化けが出てくるもんで、また亭主んどこ連つちえ行ぐげんども、消えてなくなっているんだど。おぼこ達さも教えつたら、おぼこたちは面白がつて、夜中、便所さ行つて見つけんども、いっこう出て来ねがつたど。おれはこんな恐つかね家さ居らんにえ、と思つて、嫁は実家さ歸つて、

「お化けが、夜な夜な出る家さ居らんにえ」て教えつけんども、

「そんなことあんめえちえ、恐つかねごんだら、毎晩亭主んどこ起こして便所さ行つたら、ええごで」て言わつちえ来たど。そうして毎晩亭主んどこ起こして便所さ行つてもらうげんども、いっこう出て来ねがつたけど。それで嫁は、

「ここで、おれが恐つかねえつていていれば何にもなんねえ、こんど出たら、首とっつかまえてやっぺ」と思つて、ある夜中、便所さ起きて行つたら、またお化

「けがすうつと出できたど。」

「ようし、今のうちだ」と思つて捕えて、角押えてみたら、ポチツと折おしよつた。何だべと思つて見たら、にんじんだつたけど。こんど、舌べろ何だべと思つてよく見てみたら、こんにやくだつたけど。そしてお面はがしてみだけりや、その顔はお姑ばばだつたど。

嫁は「こんがにしてまで、この家さえらんにあ、実家さ帰っぺはあ」と考えでしまつて、とうとう帰つてしまつたど。

29 おせんの話

話者 遠藤
採集 斎藤恵子
(米沢市松が岬)

おせんと親父がいたんだど。そして親父はいつもバクチ打ちさ行くんだど。んだもんだから、おせんは夜になつど、

「たんころわい たんころわい

と、山から化けものが落ちて来っから、今日は行かねでいろ」

て、親父さ頼んだんだど。親父はおせんさ、

「そがに恐つかねがったら、金ビツさ隠っちえろ」と言つて、バクチさ出て行つてしまつたんだど。すつど、やっぱし夜になつて、

「たんころわい、たんころわい」と言つて化けものが落ちて来たんだど。そしておせんの家さ入つて来たんだど。誰もいねがら出て行んかと思つたんだげんど、クシが落つたんだど。そしたら、化けものがクシさ、

「おせん、どさ行つた」と聞いたんだど。最初、クシは、「知しやね」と言つたんだど。そしたら、化けものが、

「知しやねなんて言うど、折つぞ」と言つたんだど。するとこんどクシは、

「おせんはに…」て言つたんだど。すると化けものは、

「おせんはに…何だい」と言つたんだど。クシは、「おせんはにかい」と言つたんだど。するとこんど「二階のどこだ」つて聞くと、クシは、「金ビ…」まで言つたんだど。するとクシはどうとう「金ビツ」と言つてしまつたんだど。そうした

ら化けものは二階さ行つて金ビツの蓋開けてみたら、おせんは縮こまつて入つて
いだんだど。化けものはおせんを引き出して食つてしまつたんだど。親父が遅く
なつて帰つてきて、「おせん、おせん」て呼んだげんども、返事なかつたど。そし
たら二階から血タラタラとたれて来たんだど。二階さ行つて、金ビツ開けてみた
ら、おせんのあちこち残つていたんだど。そいつ見て、親父は、

「おせん、悪がつた、あがに頼まれたのに、おれ行つてしまつて」て泣いたど。

30 鬼 娘 の 話

話者 (高畠町露藤)
採集 今井加代子

ある非常に金持ちの家に、きれいな娘いだつたど。一人娘なもんだから、贅も
らいだいと、一ぺん二へん御祝儀して贅もらつたげんども、御祝儀の晩になつど、
贅逃げでつて一人として贅にはいった人いねがつたど。

ほだもんだから、あそこの娘、鬼娘だと言わつちやど。

ある時、一人の豪胆もうたんな若衆が、

「ほんじゃ、おれ、聾ささ入るべ」と、行つた。御祝儀終して部屋さ入つた。衣装を脱いで寝んべと思つた真夜中ごろ、きれいな嫁になつた娘が髪ふり乱し、部屋の隅からカメを出して来て、血が出る子どもの死んだな取り出して、食べはじめた。それを見た聾は、ちよつと魂消えたが、豪胆な人だつたもんだから、その嫁の傍に行つて、

「お前が食かれるもんだら、おれつにも食せてみろ」と言つた。「ほら食つてみろ」と出したのは、手にとつてみたら、お菓子で作つた人形だつた。娘は、

「お前のような豪胆な人の聾が欲しがつたんだ、ほだからこいつ食つて試していいんだ」と言つて、仕合せになつた。

31 おんぶお化け

話者 佐藤
採集 斎藤操子

(川西町)

嫁もらつたばかりだげんど、臆病たがりの男がいだつたど。夜はひとりで便所さも行かんねくて、誰かさ、「行つて助けろ」て言うげんど、誰も行つて呉ねもんで、嫁に頼んだど。んだもんで、それから毎日、嫁がついて行つて呉っちゃど。んだげんども、嫁も始めは我慢しつたつたげんど、嫌やんだくなくて、おじさんのどこさ、

「おれ、あの家さ、とつてもいらんにえ」て言つて来たど。おじさんは、

「もうちつと我慢してみろ、そがな臆病たがり、おれが治して呉れっから」て言つて、ある夜、便所の上さ上がつて、赤い南瓜持つて、その男が来んなを待つてだつたど。そして男は来たど。そこさその赤い南瓜を男の顔さ落したんだど。男は、「わあ、化けもの出ねていうげんど、やっぱり出たでねえが」て、わめいたど。そしたば、嫁は、

「よつく見ろ、ただの南瓜だったんが、お化けつうのは、みな南瓜のことだな」

て思い込んでしまったと。

その村の寺あったと。んだげんども夜になつど金ピカの化けものが「おぶれ、おぶれ」て出て来るもんで、五人組の人が毎日泊りにいがなねがつたど。んだげんども、みな恐つかないがつて、化けものが出で来つどみな逃げて来つかつたど。それを聞いた男は、「そがなもの、おれが退治してくれる」て言つて、夜、寺さ行つたど。そしたばその化けものが出てきたど。そして、「おぶれ、おぶれ」て言うもんで、「そがに言うごんたら、おぶつて呉^ける」て言つて、背中さおぶつたど。そしたばかなり重^{おも}でえがつたど。

「随分、重でえ南瓜だごど」て、家さ帰つたど。五人組の人さ、

「お化けはおれが背中さおぶつたがら、後出ねぞ」て言つたば、みんなは喜んで、その家さ酒だの、何だかんだと、いっぱいお礼だつて言つて持つてきたど。そして、その金ピカの化けものて言うなは、金のカタマリだつたど。それは寺のお金で、お賽銭とか、みんなから集まつたりした寄付金が、長い間使われねでしまつてだったもので、とけて、金のかたまりになつたつたど。んだもんで、その家は

かなりの金持ちになったど。

32 南の山の太郎さ

話者 佐藤
採集 斎藤操子
(川西町)

南の山て言うなは、会津の地名だど。南は部落の名前だど。南の家の太郎さは「おら家で、お仏さま買ったがら、見に来い」て言わつちやど。そしたばその太郎さのおっかに、

「立派なお仏さまだなっし」とほめて、もしもそのお仏さまの中に孔でもあつたら、「んだげんども、そこさ節孔あんな、いたましいなあ、そこさ掛軸けじくでもかけておくといいいお仏さまになつこで」て、おっかに賞めて来いて言わつちやど。

そしたば次の日、隣の家から、

「馬買ったから見にこい」て言わつちやど。そしたばそんな時、おつかさが居ねがつたもんで、また馬見て、「いい馬だなっし」て言つたど。馬だから、尻があつたか

ら、その尻の孔を見て、

「ここに節孔があんなっし」て言っただ。「ここに掛軸じでもかけておくと、いいごでな」て言っただ。そしたばその家の主に馬の尻孔さ掛図おく馬鹿いねごで、と言わっちゃだ。

33 南 の 山

話者 渡部宮雄
採集 渡部美喜子

(米沢市遠山) 父

南の山の馬鹿いたっけど。何にもしねでいたから、ばばが、

「畑に行つて、虫見てこい」と言っただ。んだから、その馬鹿は半日、畑で虫見っただ。昼間になったら、腹へったから、家さ帰っただ。そしたら、ばばが、

「虫とつてきたか」と、馬鹿に聞いたら、馬鹿は、

「虫、いっぱいいて、上がったたり、下がったりした」と言っただ。

34 佐兵ばなし

話者 今井
採集 今井加代子
(高島町露藤) 父

佐兵という人がいて、とてもひょうきんな人でした。ある時、若衆の集まり場で、

「吉島のある家で、ひょうの皮で屋根をふいていた」と話したところが、若衆が怒って、

「そんな話はうそだ」と言った。そして、「それが本当なら、一年分の酒をおごる」と賭をした。そして五、六人一緒にそれを見に行った。その家まで行ったところが、米俵で屋根をふいていた。佐兵は、

「やっぱり、俵の皮だろう」と言った。米は一俵・二俵と数えるので、米の俵をひょうの皮と言って、若い者をついだのであった。

35 法 印 と 狐

話者 佐藤トメノ
採集 斎藤操子

(川西町)

狐が栗の木の下で寝たつたど。それを見た男が、「こんちくしょう、昼間から寝てやがつて」て言つて、構^{かま}つて（いたずら）呉^けつかと思つて、ホラの貝で狐の耳さ、ボォー、ボォーて吹いてやつたど。そしたばきつねはびつくりして、飛び上がつて、犬川さドボンて落ちたど。そして、あばとばて川の上の方き行つたど。そして狐は、「ようし、いつかきつと仕返ししてやつから」て行つたど。そしたば、その男の立つてつどこの向^{むか}こうから、人の行列が来たんだど。それは葬式だつたど。そして男の丁度そばさ穴掘りを始めたど。そして埋めて、

「惜しい人、亡くしたごど」て、みな言つて、また歸つてつたど。そしたば土の上で動き出して、今埋めた死人が出てきたんだど。そして男の足さ、すがりついて来たど。んだもんで男は逃げたど。そんでもくつついで来て、さっきの栗の木さ男は登つたど。まさか死人が木を登んねど思つてよ。

そしたばやつぱり登つてくんあど。んだもんで男は、「助けろー、助けろー」

て叫んだど。「死人がくつついで来る」て言っただ。そしたば、「何言ってる、狐だでそ」て、下さいだ男の人が言っただ。狐が化かしたんだっただ。

36 山 伏 と 狐

話者 浜田のり
採集 村田友子

(川西町上小松)

あるどこさ狐に化かされる噂あつたけど。そいつ聞いた山伏は、

「おれは絶対、馬鹿にさんにえ」と言つて、歩いて行つたけど。暗くなつてきたっけど。そしたら向うの方からぞろぞろと茶毘^{だみ}来たっけど。そしたら茶毘見たくて傍さあつた大きい木さのぼつて、山伏は降りるに降りらんにくていたら、棺の蓋^{ふた}あいで、白い着物着て出てきたど。そして、「山伏さん、山伏さん」と言つて、木登つて追っかけてきたっけど。恐つかねぐなつた山伏はどんどん登つて逃げたど。そしたら木の枝がボキッと折し^およつて、下の水さドボンと落ちたと。目覚ましてみたら、まわりは暗ぐねくて明るいどこさ、ボゲツと立つてだっけど。んだから、

「おれは馬鹿にさんねえ」なんて、ホラ吹いでみたって狐はちゃんと知ってで馬鹿にすつから、そがなと言わんにえごんだど。

37 法印と狐

話者 安部芳雄
採集 安部富美子

(米沢市木和田)

あるどこさ、法印さまがいったど。ある日、山の原っぱのあたり通っていったけりや、そごんどこさ狐が昼眠していったど。法印さまは、

「ああ、んだんだ、この狐の耳のそばで、ホラ貝吹いでおどかしてやんべ」と思つて、狐の耳元でホラ貝を「ヴオー」て吹いだど。そしたけりや、狐は魂消てピョンピョン逃げて行つたど。

「ああ、逃げでつた、逃げでつた」て笑いながら、また歩きはじめて、そこから行つてしまつたど。

その日の帰り道、さつき狐どこ馬鹿にした辺りんどこ歩いでいただけりや、だん

「だと暗くなってきたど。」

「なんだべ、こがに早く暗くなるはずねえのに」と思っていたけりや、そばにあった一本の木のそばさ今までなかったお墓があったんだど。

「何だべ、こがなどこさお墓があったりして、おかしえもんだ」て思つて休んでいたけりや、向うの方がら葬式の行列来て、そのお墓のどこさ、ちよつと穴掘ったぐらいで死人どこ埋めて行つたんだど。

「おかしいもんだ。あがな、ちよつちよつと埋めて行つたりして」て思つていだけりや、そのお墓から、すうつと幽霊が出てきたど。法印さまは、「恐つかねえ、助けて呉^けろ」て言つて、傍の一本の木さ登つたけりや、幽霊が、「法印待て、法印待て」て、上さ追つかけて来つど。また上さ登つて行くど「法印待て、法印待て、追つかけて来つけど。あんまり天辺さのぼつて行つたもんだから、木の先がボギツて折^おしよだつちえしまつたど。「ドデン」て落ちたけりや、法印さまは目さめて、周りも明るくなつてきたど。法印さまは、

「やっぱり、狐どこいたずらするもんでねえなあ、さつきいたずらしたもんで、

狐に化かにさっちえしまった」て思つて、家さ帰つて行つたど。

38 かます煙草入れ

話者 安部富吉
採集 安部富美子

(米沢市木和田)

むかしむかし、ケチで煙草の大好きなじじがいたったけど。

そのじじはあんまり煙草吸うもんで、吸うなやめっぺど思つて、煙草買う錢を買つたつもりで毎日毎日、かます煙草入れさ入つちえ貯めていたったけど。

それからずっと経^たつてから、煙草入れさ錢、しこだま(たくさん)たまつて来たど。ある晩、その家は大火事になつて全部焼けてしまつたど。じじは、錢も家も燃えてなくなつてしまつたもんで困つてしまつたど。そこでじじは考えてみたど。

「煙草じゃ煙になるもんだから、煙草入れさ錢入れつと、燃えてしまふなだ」それから、このじじは会う人に、

「煙草入れさは、錢入れどくもんでねえぞ」て教えて歩いたもんだど。

39 長い名の子

話者 浜田のり
採集 村田友子

(川西町上小松)

あるどこさ夫婦がいだっけど。そいつださ、子ども二人いだっただけど。すぐ死んだど。「何でだべ」と思っていたら、和尚さまが、「おまえんどこのは、名前短かいから命も短かいなだ。今度子ども出きたら、長い名前付けて呉つから」と言っただ。そのうち子ども出きたど。んだもんだから、和尚さまのどこさ行つたら、

「いっちよきつちよ、にきつちよ、さんげのべつとう、すつとつと、きょうやれかいぼ、たなちり、どんべんくぐりの股二郎」

と名付けたど。そして子どもが、ちつと大きくなって騒ぐようになったら、その子ども、井戸さ落ちたど。魂消たおつかさは、

「おら家の、いっちよきっちよ、にきっちよ、さんげのべつとう、すつとつと、きようやれかいぼ、たなちり、どんべんくぐりの股二郎、井戸さ落ちたから、ハシゴ貸しておこやえ」と言いながら、隣の家さ走って行っただけ。そしたらその家さは、ハシゴないがったもんで、別の家さ行つて、また「おら家の、いっちよきっち…」

そがなことしているうちに子どもは溺れ死んだけど。んだからあまり長い名前もええもんでねえど。

40 長い名の子

話者 渡部宮雄
採集 渡部美喜子

(米沢市遠山) 父

むかし、「じょん」と名付けらつちや子どもいだど。みんなから「じょん、じょん」て馬鹿にされるもんだから、親たちもかわいそうに思つて、二番目の子どもには、馬鹿にさんねように、

「へえとこ、へえとこ、へえがのこ、へめたにかめたにいつてきや、てきすりごんぼう、すりごんぼう、あのやまこのやま、ああもうす、こうもうす、もうすもうしでもうしこの、ありまのべつとう、茶碗に茶杓子、きぎにのええすけ」と名付けたど。あんまり長いから、馬鹿にさんねでええなあと思っていたらば、その子どもが井戸に落ちてしまったたど。親たちは近所の人に助けてもらうべと、「へえとこ…」と言つて廻つたげど、あんまり長いことかかったもんだから、とうとう溺れ死んでしまったたど。

(注 なお同話は、縮多江子によつて米沢市長手で採集されている。)

41 有馬の猫騒動

話者 島貫
採集 山田富士子

(川西町下小松)

さんけ猫、大きな飼つてだったど。吾一坊さまは碁が上手で、殿さまのそこさ行つて碁打つて来んなが楽しみだった。ある晩また行つたど。殿さま負けて、今

のどこ、ちよつとまてと口論しているうちに、つい殿さま、吾一的首切ってしまったんだから、家来さ命じ、こつそりと人の目の見えないところさ埋めさせた。ばばは、夕べ、また行つたげんど二日も三日も帰つて来ないので、心配しつた。そして猫に言い聞かせた。

「にしゃ（お前）、かまわず厄介になつてんけん、坊さまどこ探ねて来い」て、くどいたど。猫はばさまに化けて、すつと立つて行つたど。猫が御殿さ行つて探ねつたとき、菜種油あつたの、舐めつたど殺しぱぐつた。猫は坊さまの首かぶつてきたど。

42 おるい峠の大蛇

話者 佐々木
採集 高野美喜子

（米沢市峠）

むかし、新湯と山形の境の深山に、六代目の狩人がいたんだど。狩人は六代目まで継ぐと悪いことが起ると言い伝えがあつたんだど。

狩人にはおるいという女房がいたんだ。ある日、狩人は大きな大蛇をとってきたんだ。そしてそれを味噌漬にしたんだ。んだげんども、大蛇の味噌漬は万人にまたがれないと食べらんねことになっていんだ。だから狩人は玄関の軒下に味噌漬にした大蛇の壺を埋めたんだ。数か月して、狩人が狩りに出かけるとき、女房のおるいに、どんな人が尋ねて来ても、絶対大蛇の味噌漬を出しては駄目だぞと念を押して出かけて行ったんだ。狩人の留守中に坊主が尋ねて来んだ。坊主は、「大蛇の味噌漬は癩病に効くんだが、近所の人に聞いて来たんだ」と言うんだ。そして手をついておるいに頼んだ。おるいはあんまり言われるもんだから、ちよつとだけだったら分らないであろうと思つて、一切れを分けてやったんだ。そして自分もちよつと舐めてみたんだ。そしたらそのうまいこと、うまいこと、トロトロツとしていて、止めらんねぐなつたんだ。一切れ食べ、二切れ食べ、しているうちにとうとう全部食べてしまったんだ。食べ終つたとたん、ノドが乾いてきたんだ。台所に行つて水を飲んだげんども、そんでも足んねもんで小川に行つて飲んだんだ。そんでも足んねくて、おるいは川を

どんだんのぼって行っただだ。そして大蛇になってしまったんだ。

それから何年かして、新潟と山形の境の峠で、ゴゼ様がビワをひいて休んでいたんだ。したら一人のきれいな女の人が現われて、私はあなたのビワに聞き惚れてしまいました。あなたにわたしのことを教えましょ、わたしは大蛇なんです。そして今、あそこに見える山を三回半まわって住み家を作るところです。このことは、他の誰にも話してはいけません。もし話したら、あなたの生命はなくなり、すぐ死んでしまうでしょうと言って、消えてしまったんだ。ゴゼ様は恐ろしくなって、急いで峠を下って行っただだ。そして山の中にある部落に行つて、このことを話したんだ。そして大蛇は、鉄の棒が嫌いだということ聞いていたゴゼ様は、そのことも村の人に教えたんだ。するとゴゼ様はその場で死んでしまったんだ。村の人たちは、これは大変だと言って、すぐに山の周りに鉄の杭を打ったんだ。すると山はぐらぐら動き出して大蛇は死んだんだ。その大蛇は実はおるいだったんだ。だからその峠を「おるい峠」と呼ぶようになったんだ。

43 お 春 地 蔵

話者 関場
採集 渡部美喜子

(福島市庭坂)

むかし、嫁がいて、毎日そのばばに、いびらつでいたど。ある日、嫁が麦を搗いったら、ばばが出てきて、

「そんなことで搗けっか、おれがすっから、よこせ」と言つて、杵をとりあげて嫁の頭をなぐつて殺して、沼になげてしまったど。

そしたら、祟りが起つたもんだから、地藏さまをつくつて祭つたのが、お春地藏のはじまりだど。

44 狐に化かさつた話

話者 関場
採集 渡部美喜子

(福島市庭坂)

あれはいつだったかなあ、友だちと別れてから、一人で山道を歩いったら、だんだん日暮れて、暗くなつたもんだから、道がわからなくなつた。

「ずい分、暗くなっちゃったなあ」と思ってたんだ、急に道んどこが明るくなった。その道がとってもいい道に見えたから、「いい道できたなあ」と思って、石の上さ腰かけて一服したら、ガサガサと音して、一匹のけものが出てきて、パツと逃げてしまった。そしたらまた暗くなっちゃった。あれはきつと狐だったんだなあ。

45 竹やぶの狐

話者 我彦みつぎ
採集 我彦優子

(米沢市三沢)

梓山の高寺のわきの竹やぶあった。その竹やぶには狐がいて、人をおどかさよなことをすんだと、言われていたもんだから、そこを通るのが恐つかなかつたもんで、あんまり通んねがった。少しでも笹が動くと、狐が出てきつたんだと思つていた。いつもいつもビクビクしていた。ほだげんでも、本当に狐がいるかどうか、自分の目で確かめてみなくて、「おれが退治してやる」と言つて度

胸据えていつてみたど。ほだげんども、狐なんてうそっぱちで、何も出てこながったんだど。

人間というのは、いつもそういわれでっからって、びくびくしていだんでは駄目だど。心を決めて、度胸すえて、ほんとに確かめる気持ちがないと駄目だな。

46 生きかえった人

話者 安部芳雄
採集 安部富美子

(米沢市木和田)

今から百年以上も前の話だごでな。隣の部落の馬喰やってだ人のずっとずっと前の人が、日本ではじめて警官でたとき、その人は寒河江のあたりさ行って、駐在所さつとめったたつたど。その人が夜、近くのどこ見廻りしたところ、お墓がいっぱいあつところから、何だか「しくしく」って泣く声が聞えて来んのだど。

その人は恐つかねげんども、恐るおそる中の方さ行ってみたんだど。そしたけりあ、真白い着物きた女の人がしゃがんで泣いていたんだけど。たまげでしまったげん

ど、仕方なくて、

「なんで、こがなどで泣ிட்டごんだ」と言つて見つど、その女の人は、

「なんだか分んねげんども目さめてみたら、きゆうくつだったもので、いきなり力出して起きて周りのところ、こわしてみたら、こんなどこさいたんだ」と言うなだど。んだもんで、その駐在さんは、

「お前の家、んじやどこだごんだ」と言うのと、

「こがなどこさ埋めらうちえいだもんだもの、いまごと帰つて行かんにえ」と言つて泣くもんで、

「んじや、おれついで行つて呉^けつから、家さ帰つぺ」て言つて、帰つたんだど。

そしたけりや、その家の中からは、カーン・ムニヤムニヤ・ナンマイダブツつて聞えて来んなだど。駐在さんは「こんばんは」て言つて入つてみだけりや、そこでは葬式やつていたんだつけど。駐在さんは、

「こつちの家で娘さんなくなれやつたが」と聞いてみつど、きのう死んで、今日葬式やつていだけんども……」て言うなだど。駐在さんが、

「その娘は、まだ生きったぞ」て言つて、その女の人を見せつど、みんな聞いた人たちはびつくりして、幽霊だと思つたど。んだげんどもいろいろその女の話ときいでつど本当なもので、みんな幽霊でないと分つて、葬式がお祝いの式になつたど。そしてその駐在さんはその娘の躰になつて、暮したど。その娘は百才も長生きしたもんだつたけど。んだから一日も経^たたねうち死んだがらつて埋めるもんでねえなだ。棺桶も人やつと入れるぐらゐに小さくなつてゐるのは、埋まつてがら生き返つて出てこねようにするためなんだど。

47 酒田の本間さま

話者 梅津政五郎
採集 梅津寛子

(米沢市梓山)

酒田の本間さまじあ、ある日、夢見たごんだど。そいつあ、商売道具のハカリが折れた夢だつたんだど。本間さま、考えたごんだど。

「ハカリ、折つちえは明日から飯食わんにえがもしんになあ。ほだげんども、も

しかして俺ばかりということになっかもしんね」と言うごどで、一生けんめい働いだんだど。そしたば「おれ（俺）ばかり」にえらくなつたんだど。

48 本間さま

話者 桐沢
採集 梅津寛子
(米沢市梓山) 祖母

まいど、越後のノツタリに、マノミゾウという人いだごんだど。そいつあ毎日炭小屋のさかさ小屋さ居て、雑魚釣りしてだつたもんだど。そしたら仲間の人に、「酒田の本間さまさ、うんと金持ちで大尽つうことだから、大尽つき合いますっぺ」と言つたど。マノミゾウだら、

「そがなどこさ、何着て行くか」「ハカマと羽織着て行けばいいべ」といつて、一緒に行つたごんだど。本間さまさ着いたば、わらじ汚したつたもんだから、金のタライ出さつちやど。仲間のみんなはありがたくて、水かけたばっかりだつたど。マノミゾウだら、両足入つて、ごそごそ洗つたど。そしたば酒田の本間さまのおつ

か、

「いや、これ何ほどの大尽か分んねぞ」と言つて、娘呉くつちやくなつたど。

「娘呉くつちやくなつたから、もらつて呉ろ」と、おつか言つたらば、

「呉れつう時、もらうごで」と言つて、もらつて、それこそタンス、パサミ、長持、タライともらつて、大したムカサリ送つたんだど。そして行つてみたどこ、山小屋のさかさ小屋だつたど。ほだもんだから、娘はおばさとおんつあに、
「とてもりつばな家だと言つてけろ」と言つてマノミゾウの嫁になつたど。マノミゾウと雑魚とりしてうんと苦労したごんだど。

そしているうちに、越後ののつたりに、大した立派な家だげんど、化けものの屋敷だつたもんで、誰もいねぐなつた家あつたごんだど。ほだからマノミゾウと嫁さ見はりしたど。マノミゾウだら恐つかなくて嫁の尻さ隠つちえいだど。嫁一人で見つだらは、上段の床の間からミツチミツチという音聞えたかと思つたら、化けもの出てきて、ちゃんかちゃんか、ちゃりんちゃりと踊り踊んだど。

そして夜が明けてきたら、またミツチミツチと上段さ、いねぐなつたもんで、

上段開けてみたごんだど。そしたら大判、小判がざつくざつくとカメの中に入っていたんだど。そいつあ、まいどの大尽がかくしったお金が娑婆さ出たくつて、七福神に化けて、おどりおどったんだべ。嫁はその金で家を修繕して、おつかとおど呼ばって幸せにくらしたんだど。とーびんと。

49 八方屋長者

話者 我妻よう
採集 梅津紀子

(米沢市古志田)

何年位前だったが、八方屋長者屋敷あつたど。大した金持ちで殿さまみたいだったけど。その金、半分に分けて、あつちとこちさ埋めて、与助という人とお藤という人、夫婦で下男下女だったそうだが、生き埋めして、金の番させだど。そして目印にみっばづぎ植えておいたど。その、生き埋めにしたもんだから、しばらくは夜になつど二人で呼び合つてる声がしたもんだけど。あとになつてから、お藤さ埋まつてだ方掘つてみたら、カマスさ、ひとつず、小判出たけど。その八

方屋というのは、八棟も倉のあった家であつたど。

50 顔より心

話者 広居
採集 梅津紀子

(米沢市直江町)

しあわせな娘いだつたごんだど。たつた一人の娘だつたげんども、その器量悪いのはすごいもんだつた。それで、生まつてからずっと家の中で育てつたごんだど。そのうち、人並に年頃になつて、いろいろ心配して、家さ出入りした大工だか左官だかの息子さ話したんだけど。こういう不器量さだげんども、かたい人だから、結婚してけんないが、て言つたら、そがい言うごんだらて結婚したど。仕事から、夫婦そろつての会合もあつたそうだ。げんど一ぺんも表さ出なかつたもんで、会合さも行がねがつたど。そうしているうち、あんまり来ないど罰金とられるようになったんだど。何回か金出したげんど、なかなか大変なもんでその奥さんが氣の毒になつてきて、一緒に会合さ出たど。

その器量わるいのは、すごがったもんで、早々に帰ってきて、その奥さんは旦那さんに気がねして別れて呉ろっていったげんども、「顔な、どうあつても心いい妻だから、絶対別れたりしね」て、それからもしあわせに暮したど。

51 孫惣の親孝行

話者 山木とみ
採集 二瓶久美子

(高畠町亀岡)

むかしむかし、その昔、上和田の浅森に鏡孫惣という大へん親孝行な人がおりました。

ある日、年とった父が何を思い出したのか、

「江戸見物さ行きでえなあ」と言ったそうです。その時、孫惣は何で出かけたらよいかと考えた末、今では乗り物もいろいろありますが、その頃はなかったもので、早速、大八車をこしらえて、それにのせ、江戸見物に出かけたそうです。何十日か経^たって、ようやく江戸の近くになったとき、

「いやいや、よくよく江戸など見たくねえ、家さ帰る」というので、孫惣は何も言わず戻ったそうです。あたり前の人なら、「ここまで来たんだから」と文句も言うでしょうが、そこは孫惣は親孝行な人なので、すぐに大八車を引いて家に帰ったという、孫惣の親孝行話です。大八車は今でも孫惣のところにあるそうです。

第二部 伝説・伝承

1 神 仏

○お文殊さまとお普賢さま（米沢の宿借り普賢）

昔、お普賢さまはとても金持の神さまで、どうして金を減らしたらよいかと、毎日苦労しておった。そして文殊さまにその話したら、「そんなら、毎日御飯のときの箸を焼いてしまうと貧乏になる」と教えられたので、そうやったら貧乏になり、家も屋敷もなくなり、文殊さまにすがって家を借りることにした。したら文殊さまも、「私もこの家だけしかないが前は貸せないが、裏なら貸してもよい」というので、借り、文殊さまの智慧の足りないところを教えることにしたんだそう。今でも箸は火に焼かず川に流せという。

（色摩清見、採集・清水節子）

○古志田の明神さま

お明神さまというのは、火の中でオボコ産した人だけど。その人が祀られているもので、古志田にはカタワも生まれなし、安産するそうだ。

（採集・梅津紀子）

○亀岡の文殊さま（高畠町）

亀岡の文殊さまというのは、お蔵王さまに十年の約束で家貸したそうだ。そしてたらお蔵王さまは「十」に「ノ」をつけて「千年」にしてしまったので、金の賃借はむずかしい漢字使うようになったそうだ。お蔵王さまというのは白蛇のことだそうだ。

（梅津政五郎、採集・梅津寛子）

○亀岡文殊にある大黒天

むかし、文殊さまに、米沢の侍がお詣りに来たど。大黒さまを拝んで、「こげな

木の棒杭、何だい」といって、「試しに切ってみるか」と切ったら、血が出てきた。その侍が帰らぬうち、米沢の町の空に大黒さまの姿が現われ、その侍の家が火事になったそうだ。

(採集・森幸子)

○高畠高安の犬の宮

坊さまが道に迷って、高安の山の方に入った。日が暮れたので石に腰をおろして三昧をひいていたら、狸むじなが出て来て、「甲斐の国の三毛と四毛にそのこと教えんな」と三昧に合せて歌いながら踊った。朝になって、狸がいなくなってから、坊さまは高安の里にさがった。そしたら里では、庄屋の家に、白羽の矢が立ったといつて、娘を年貢に上げなければならぬと言つて、大騒ぎしていた。坊さまは夕べのことを言つて、甲斐の国から三毛・四毛を買ってきた。その日がきて、犬を箱の中に入れて、山に置いてきた。夜になって狸が娘だと思つて箱をこわして食おうとしたら犬だったので大喧嘩になつて、朝見たら、狸がみんな死んでい

たが、その犬も死んでいた。坊さまもたたりで死んでしまった。三毛・四毛犬と坊さまを祀って、「犬の宮」を建てた。

（森うゑの、採集・森幸子）

○弘法大師

弘法大師が石灰山（今の洞ヶ沢）を通った時、そこで腰をおろしてサカサ木の杖について来たのを、さかさにしておいたら、それに根が生え、大木になった。また市野々を通ったとき、水を飲みたいと思っていたら、沢から水が流れてきたので、それからそこを「市野々清水」という。

大師が餅を食うとき、餅がのどにつつかえねように、大根おろしと一緒に食うのだそう。

（我彦光貞、採集・我彦優子）

2 地名・その他

○小僧仇（羽黒川上流・米沢市関根）

深い川の上き寺があつて、その小僧が和尚さんにいじめられて、その川に身を投げて死んだので、そこを「小僧仇」と呼ぶが、その後も幾人かが水泳に行つて死んだそうだ。水窪ダムにより浅くなつてしまった。

（須藤金次、採集・須藤智恵子）

○ビツキ石（万世町桑山）

置賜地方はむかし湖だった。そこに蛙^{びつ}が住んでいて、神さまと賭をして、蛙は湖の水をみな飲み干してみせると言ったが、それはできなかった。それで蛙は神さまから石にされてしまった。

（須藤金次、採集・須藤智恵子）

○八幡太郎の矢（米沢市三沢）

西地堂の薬師、八幡太郎義家が打った矢が今の広幡の八幡宮にまで行ったのでそこに八幡宮が建てられた。

（我彦光貞、採集・我彦優子）

○柳ヶ原の妙円寺（米沢市）

百年ぐらい前、米沢は城下町で、せまい町で、東は大町ぐらいまでしかなかった。その向うが松川橋で土橋であった。そのころ柳町（大町二丁目）に妙円寺という小さい寺があり、すすき野で昼もくらかった。ある時万世村の三郎兵衛という百姓が町に用達しに来て、親戚の家でお話して、お土産に板の油揚げ（米の粉をねって油であげたせんべい）をもらって帰るとき、橋を渡りはじめて、いくら渡っても終らない。そのうち提灯がちらちらして、一生けんめい渡っているうちに東の方が白々と明けてしまい、見てみると揚げは一枚もなくなってしまっていた。柳ヶ原の狐だったそうだった。

（採集・中村恵子）

○雨乞い

日でりのとき、お蔵王さま（蛇の神）にお詣りに行つて、法じよう様が目かくしをして、お堂の中に入っていた。その中には井戸があり、それに新しい菰をかぶせると雨になるという。

（採集・森幸子）

○からす

普通、夕方、西の方さ、からすは帰るもんだけど。東の方へからすが行くときは、あした天気が悪くなるという。からすは頭がよいから、山が荒れることを知つて里に降りてくる。

（採集・井上礼子）

○十二月大晦日の食べもの

関根（米沢市）字樋の口の須藤家では大晦日に一日中「ナマクサ」を食べない。むかしどこの家でも魚料理をしておったが、火を焚いてイロリのカギにナベを下げて魚を煮いたところ、蛇がカギにぐるぐるまきついていて。それからナマクサを食べないようにしたという。

（採集・須藤智恵子）

○ハンの木

稲田の中に上の方だけ枝のある木がハンの木です。このあたりは山から遠いので、薪をとるのに不便でしたので、農家の人々が植えたものだそうです。暑い夏の日盛りに一服しに、ハンの木の下で涼み、秋の刈り入れには稲杭の代りになり、冬には下枝を切って薪にするようにしたものです。

（増川莊重郎、採集・増川百合子）

○虫送り ― 川西町下小松

虫送り、神おくり、悪病送りという行事が昔あった。永松寺の太鼓を初簣に背負わせて叩いたという。風神送りには風の神のわら人形を作って村境までもって行ったし、お田の神送りには刈上げの後に「おかげさまで…」と挨拶して送ったものだ。

(島貫、採集・山田富士子)

○「ころころ」とやははえろ ― 正月十五日の行事

カセドリ「餅呉ろ、ころころ、くご帽子かぶってアキの方からころげ入り申した」

ヤハハエロ「センキ・スンバコ持つて行げ^ん」

(採集・山田富士子)

第三部 わらべうた

1 手まりうた

○いちかけにかけ

いちかけ にか さんかけて
しかけて ごかけて 橋をかけ
橋の欄干に腰をかけ はるか向うを眺
むれば

十六、七のねえさんが 花と線香を手
にもって

ねえさん ねえさん どこ行くの
私は九州熊本の西郷隆盛むすめです

明治九年のたたかいに 切腹された父
親の

お墓まいりにまいります

お墓の前に手をあわせ

なみあむだぶつを拝もうせば

お墓の中からゆうれいが

フーワリ フーワリ ジャンケン

ポン

二本橋 コチヨコチヨ

たたいて つねって

階段のぼって コチヨコチヨ

お寺の鐘が ゴンゴン

(斎藤恵子、高橋礼子、増川百

合子、枝松美和子)

*手あそび、ジャンケン遊びにも

唄われるもので全域にひろがっている。

○あんたがたどこさ

あんたがたどこさ 肥後さ

肥後どこさ 熊本さ

熊本どこさ 船場さ

船場山にはたぬきがおつてさ

それを猟師が鉄砲で打つてさ

煮てさ焼いてさ食つてさ

それを木の葉でちよつとかぶせ

(佐藤靖子、安部富美子、斎藤

恵子)

○だいすけ

だいすけ だいすけ

お手まる つくかつかぬか

おしめしめなわ

糸ごんごじゅうめ 糸ろくろくじゅうめ

糸しちしちじゅうめ 糸はちはちじゅうめ

糸九十九まで とと百ついた

(梅津恵美子)

○いちもんめの

いちもんめのいすけさん

いもやのおばさん いもちょうだい

にいもんめのいすけさん

にんじんやのおばさん にんじん

ちょうだい

さんもんめのさんすけさん

さかずきやのおばさん さかずき

ちょうだい

よんもんめのようすけさん

ようかんやのおばさん ようかん

ちょうだい

ごもんめのごんすけさん

ごぼうやのおばさん ごぼうちょう

だい

ろくもんめのろくすけさん

ろうそくやのおばさん ろうそく

ちょうだい

ななもんめのななすけさん

なっぱやのおばさん なっぱちょう

だい

はちもんめのはちすけさん

はちみつやのおばさん はちみつ

ちょうだい

きゅうもんめのきゅうすけさん

きゅうりやのおばさん きゅうり

ちょうだい

じゅうもんめのじゅうすけさん

じゅうばこやのおばさん　じゅうば
こちようだい

（佐藤京子、近野美智子）

○いちもんめの

いちもんめのいすけさん

いもやのおばさん

一万一千一百億　いといといとまの

おうらいさだめて　がつてんとん

がつてんとん、がつてんとん

〔以下、二万、三万…十万と続く〕

（近野美智子）

○てんてんてまり

てんてんてまり　てんてまり

てんてん　てまりのてがそれて

あの山越えて　谷越えて

表の通りに　飛んで行った

飛んで行った

（佐藤靖子）

○てんてんてまり

てんてんてんまり　てんてまり

てんてんてまりの　手がそれて

どこからどこまで　とんでった

垣根をこえて　山こえて

とんでいった　とんでった

(増川百合子)

○一のまの千石

一のまの千石

二のまの千石

三のまの三平が

四つ横浜 えっさっさ

五ついつもの学校へ

六つ村祭り

七つ南天 何曜日

八つ八重桜

九つ金ぴら ぴらぴら

十でおわった

(二瓶久美子)

○いちだんいちだん

いちだん いちだん

赤いネクタイ 長ズボン

山高帽子に銀のつえ

どうせおいらは なまけもの

後向いて前向いて バイバイ

「以下、にだんだん…さんだんだん」

(枝松美知子)

○てんてんてまり

てんてんてまりの昔の数

ひい ふう みい よう いつ むうつ

ななっとかぞえて やつになれば

わたしは尋常一年生

ああうれしいな うれしいな

(鈴木博子)

○一番はじめは

一番はじめは 宇都宮

二また 日光東照宮

三また 佐倉の宗吾郎

四はまた 信濃の善光寺

五つ 出雲の大社^{やしろ}

六つ 村々鎮守さま

七つ 成田の不動さま

八つ 八幡の八幡宮

九つ 高野の弘法寺

十で 東京泉岳寺

(山田富士子)

○だんごがおよめに

だんごがおよめに行く時は

あんこときなこで化粧して

赤いお椀に入られて

ゆらゆら ゆらゆら

(枝松美知子)

○あのねそのね

あのね そのね よっちゃん

が 電車にね ひかれてぺっちゃん

(枝松美知子)

○とんとんとなりの

とんとんとなりのきちばさま

あんまり 欲ばり 腹だして

あんもち焼くとて へそやいた

(今井加代子)

2 お手玉うた

○おひとつおろして

おひとつ おひとつおろして

おさらい

おふたつ おふたつおろして

おさらい

おってんしゃん おってんしゃん

おろして おさらい

おつかみ おつかみ おろして

おさらい

おちりん おちりん おっさらい

おひだり おひだり あわせてだあり

だり

なかとつて しわよせ おさらい

せえすけ しょうすけ おさらい

おてんぷし おてんぷしきりして

おさらい

ごんきょうの ごんきょうのきりして

おさらい

かんぎょ るいるいきりして

おさらい

おばさま おばさま おばさま

おばさまきりして おさらい

おたもと おたもと おさらい

おこそで おこそで おさらい

おしんちゃ おしんちゃ おさらい

おてした おてした たたいてひろつ

て なげて

おおやまのっこえろ のっこえろ

かえして おさらい

ぬりかえ ぬりかえ ぬりかえきりし

て おばかえ

おばかえ おばかえきりしておさらい

いさきも一升 いさきも二升

いさきも三升 いりめも四升

おまけで五升 おさらい

さらって おばかくし かくしましよ

次の方 おあてなさい

(佐藤靖子、佐藤京子)

○おさらい

おさらい おひとつおひとつおろして

おさらい

おふたつ おろしておさらい

おてさげ おてさげおろしておさらい

おつかみ おつかみおろしておさらい

おちりん おちりんおかけておさらい

おひだり おひだり おひだりたたい

て 中きつて しんめ

しんめとさつぱ さらりとてーすけ

しょうすけ

さらりとおでふし おでふしおでふし

手ぬげで おさらい

さらりと かんぎよ

おきふな おきふなおろして

さらりと かんぎよ

かんぎよ かんぎよまぬげて

さらりとおこひぎ

お小袖 お小袖 たたいておさらい

おたもと おたもとたたいておさらい

お手下 お手下 たたいて

さらりと おかはし

おかはし おかはし たたいてまぬげ
て

えっさけ えっさけ 一升

えっさけ えっさけ 二升

えっさけ えっさけ 三升

えっさけ えっさけ 四升

えっさけ えっさけ 五升

おかくらし

(梅津寛子)

○ひんでひんで

ひんでひんで みでよんで

いこいんで あんまよんで

いちまんは にじゅういち

さんじゅうふりそで しじゅうしごば
た

ごじゅう結んで ろくじゅうまめぼそ
しちじゅう ひ ふ み よ

はちじゅう ひ ふ み よ

ごじゅつかんのかわいい (○○さん)
いっちょ かし申した

(山田富士子、梅津恵美子)

○おさらさらさら

おさらさらさら

宮のさいれんさん おくまんさん

たばこの煙出し ちようはった

ひ ふ み よ いっ む なな

やあ ここと

とうといお寺の鐘になる

今なる鐘は除夜の鐘 いっちょかし申
した

(増川百合子、今井加代子)

○おっしよのさらさら

おっしよのさらさら

さらさら さらぎやね

たばこの煙出し じようはった

ひい ふ み よ いっ む

なな や ここのと

とうとうお寺の鐘になる

今なる鐘はどこの鐘 除夜の鐘

じよやごや申せばありがたや

ただいっちょついだ

(田村美代子)

○大波小波

大波小波　せんどうさんが

ひつくりかえつて　大さわぎ

(佐藤靖子)

3　なわとびうた

○大波小波

大波小波で風が吹いたら山よ

郵便配達　お上の御用でえっさっさ

ささまきこ　こっぱのこ

(鈴木博子、田代美代子)

○おじょうさんお入り

おじょうさんお入り

おはいりになったら　じゃんけんぽん

負けたら　さっさとお逃げなさい

(縮多江子、佐藤京子)

○くまさんくまさん

くまさんくまさん　まわれ右

くまさんくまさん　手について

くまさんくまさん 片足あげて
ひ ふ み よ い つ む な な や
ここの と

(縮多江子)

○一羽のからすが

一羽のからすが かあかあ

二羽のにわとり コケコッコー

三羽のさかなが およいでる

四つのようなかん 食べたいなあ

それ一ぬけろ それ二ぬけろ

それ三ぬけろ それ四ぬけろ

(田村美代子)

○ひといいりひい

ひといいりひい ふたいりひい

みいいりひい よいいりひい

ごいいりひい ろくいいりひい

しちいいりひい はちいいりひい

きゅういいりひい じゅういいりひい

(梅津恵美子)

○たわらのねずみが

たわらのねずみが一匹だ

ほら二匹だ ほら三匹だ ほら四匹だ

ほら五匹だ：

ほらおかえり ほらおかえり

ほらおかえり：

(鈴木博子)

4 集団あそび

○おおやまの

おおやまの えんどう豆が あおくさ
い

おひめさま にげだした おとのさま
おいかけた いちはっさい にはっさ
い さんはっさい：

いちぬけろ それにぬけろ
それさんぬけろ：

(鈴木博子)

○あのね和尚さんがね

あのね 和尚さんがね

暗いお堂でね いちりこらんらん

なむちん かむちん あら見てたのね

いちりこ らんらん

らっきよ食ってしっしっ

しんがらがって きやつきやつ

キャベツで ほい

(飯沢紀子、高橋礼子)

○三人遊び

(一人はさそう人、一人はお母

さん、一人は子ども)

○○ちゃん、学校さ行がねが

今、寝った

○○ちゃん、学校さ行がねが

今、歯みがいった

○○ちゃん、学校さ行がねが

今顔洗ってだ

○○ちゃん、学校さ行がねが

今服きった

○○ちゃん、学校さ行がねが

今、飯食^{まき}ってだ

○○ちゃん、学校さ行がねが

今行った(子どもが走って逃げる)

え?(追いかけて頭を三回叩く)

(佐藤京子)

○泡ぶくたった ― おにごっこ

あわぶくたった 煮たった

煮だかどうか 食べてみる

まだ煮立んね となりのおばさん

時計は何時 三時

お前のお名前何と おにさん

柳の下の大入道 よしよし

(佐藤靖子)

○いったんこ

いったんこのいったんだるまのこ

いっさらもっさら　でてきて

いのはまいんぐりこ（アラ）いんぐりこ

にいたんこの　にいたんだるまのこ

：

（村田友子、枝松美知子）

○いちりっちゃん

いちりっちゃん　ころりだるまの

めだまのころりちゃん

にいりっちゃん　ころりだるまの

めだまのころりちゃん

〔以下、三、四、五…と続く〕

（村田友子）

○どのせんべいが

どのせんべいが焼けたかな

神さまのいうとおり

えびすさまにも大黒さまにも

聞いてみる

じじばばたのんで聞いてみる

＊火鉢に数人で手をかざしてこ

の歌を歌いながら、一人が一方

向に手のひらを指さしながらま

わり、「じじばば…」で、当たっ

た人は手を裏返して当たる。

（鈴木博子）

○おらえのこんぺんとう

おらえのこんぺんとうは

ほんとに困ります 困ります

困ったあとから 涙がぼろぼろぼろぼろ

ごほしたあとから おたもとで

拭きましよ 拭きましよ

拭いたあとから おたもとを

洗いましよ 洗いましよ

洗ったあとから おたもとを

干しましよ 干しましよ

干したあとから おたもとを

はずしましよ はずしましよ

はずしたあとから おたもとを

たたみましよ たたみましよ

たたんだあとから たんすを

開けましよ 開けましよ

開けたあとから おたもとを

しまいましよ しまいましよ

しまったあとから たんすを

閉めましよ 閉めましよ

閉めたあとから ねずみが

がりがり がりがり

かじったあとから たんすを

開けましよ 開けましよ

開けたあとから おたもとが

ぼろぼろ ぼろぼろ

ぼろ屋さ売ってやれ 売ってやれ

(飯沢紀子、高橋礼子)

○下駄かくし

下駄かくしまんないた

まんないたの下で

味噌ふり塩ふり しょっぱいぴ

数の子好きなやつ抜けりゃんせ

(増川百合子、村田友子)

○下駄かくし

下駄かくしまんないた

まんないたの下で

やすべのおかたが死んだと言われて

味噌なめ 塩なめ しょっぱいぴ

(梅津恵美子)

○かごめかごめ

かあごめかごめ

かごの中の鳥は いつまで鳴きやる

夜中のぼんに

つるとかめのかあけっこ

だあれがうしろ

(清水節子)

○子とり

子買お 子買お 子があてなんしょ

みのぜん こまぜん こまくらぜんよ

㊤それがよければ どの子が欲しい

③ あの子がほしい

④ 何買つて食せる

⑤ まんじゅう買つて食せる

⑥ まんじゅうは腹の大毒で

⑦ 洗つてやる

⑧ あらんくさくなる

⑨ 拭いてやる

⑩ ふきんくさくなる

ほんじゃお椀に金いっぱい

はつまカサリ

(田代美代子)

○ なかのなかの
なかのなかの地蔵じんぞう

なして そんなに家小ちつちやい

にくまねから おがれおがれ

(田代美代子)

○ 花いちもんめ

勝つてうれしい花いちもんめ

負けてくやしい花いちもんめ

となりのお婆さん ちよつとおいで

鬼がこわくて行かれない

お鍋かぶつて ちよつとおいで

それでもこわくて行かれない

おふとんかぶつて ちよつとおいで

まだまだこわくて行かれない

杖をついて ちよつとおいで

あの娘がほしい この娘がほしい
相談しましょ そうしましょ

となりの○○ちゃん ちよつとおいで
で

となりの○○ちゃん ちよつとおいで
で

ジャンケンポン

(小山田純子)

○蛙どの蛙どの

蛙どの蛙どの いつ死んだ

夕べの餅食って 今朝死んだ

お医者さま来たから 戸をあける

カラトンカトン こんにちは

コンニャク一枚 油揚げ一枚

スポポンのポン (あわせてジャンケンポン)

(清水節子、安部芙美子、二瓶久美子)

5 口あそびうた

○つぶつぶ

つぶつぶ山さ歩えべ

おらやんだ おらやんだ

からすという黒鳥に

尻のまんがり目を

ちよくちよくとつつかれて

雨さえ降っじど

じつくじつくと痛みます

(村田友子)

○静御前の

静御前のおそばには

頭つるつる 武蔵坊

あいつおれより ちと強い

何でも坊主と見たならば

逃げるが勝ちよ がってんだ

かしこまつてございます

(村田友子)

○さよなら三角

さよなら三角 またきて四角

四角は豆腐 豆腐は白い 白いは兎

兎ははねる はねるはノミ ノミは赤い

赤いはほおずき ほおずきはなる

なるは屁 屁はくさい くさいは便所

便所は深い 深いは海 海は青い

青いは空 空は高い 高いは富士山

富士山はすべる すべるはおやじのは

げ頭

(遠藤豊子、佐藤靖子、村田友

子)

○おみやげ三つ

おみやげ三つ たこ三つ

あした天気になあれ

おまけ バイバイ

(佐藤京子)

○数え唄

一にたちばな 二にかきつばたね

三に下りふじ 四にししぼたんね

五ついやまの千本桜

六つ紫いろよく染まるね

七つなよせば 八つ山ぶきはね

九つ小梅はちらちら落ちるね

十と殿さま葵の御紋ね

丸山土手から東を見ればね

門の扉はおとわさがいたのかえ

おとわさしたるべっこうのクシはね

誰にもろうたか源次郎さにもろたのか

もらった男は役者でないかえなえ

役者みこんでおとわさは恋れたのかえ

(梅津恵美子)

○大黒舞唄

一に俵をふんまいて

二にっこり笑って

三に盃さして

四つに世の中よいように

五つ泉の湧くように

六つ無病息災に

七つ何ごとないように

八つ屋敷を平らげて

九つ小倉をおつ立てて

十でとうとう納まった

(近野美智子)

○お正月は

お正月はええもんだ

雪のような飯^まくって

油のような酒の^こんで

木^こっぱのような魚^とくって

お正月はええもんだ

(井上礼子、遠藤豊子、田村美

代子、近野美智子)

○悪口うた

△馬鹿かばまぬけ ひっとこなんきん

南瓜 一銭五厘の下駄買って 便所

掃除がつらがんべ

(佐藤京子)

△泣き虫毛虫 はさんですてろ

(近野美智子)

△馬鹿かばちんどんや ひよつとこ

南京かぼちゃ お前のかあちゃん

出べそ んだからお前もでべそ

(近野美智子)

△でぶでぶ百貫でぶ 電車にひかれて

ぺっちゃんこ

(近野美智子)

△みちこみんがらがって　みたまたみ
ねじ　みってみられてみんな　ほ
いはい

(近野美智子)

△ひとつふたつはいいけれど
みつつ三日月はげがある
よつつよこちよにはげがある
いつついつ見てもはげがある
むつつむこうにはげがある
ななつななめにはげがある
やつつやっぱりはげがある
ここのつここにもはげがある
とおでとうとうつるっぱげ

(山田富士子)

○米搗きうた

おく山でひとりで米搗くあの水車
何を待つやら　くるくるとこぬか
こぬか出よ
あら日を送るよ　いつかまた
世に出てま・まとなる

(梅津恵美子)

○畑^{はた}の中の石ころが(仙台)
畑^{はた}の中の石ころが一人つぶやく声きけ
ば

われとまめとは大小の
ひってきならぬ　みのそうへ
いかでかまめにまくべきと

きのうたかぶり　いたりけり

しかるにまめは知らぬ間に

ようようそう立ち　成長し

葉が出る　花咲く実を結び

さやがはじける　子ができる

思えばきのうに変わりなき

わが身のかいなき　はずかしさ

(田村美代子)

○さらばよ

*数人が輪になって手のひらに

かくれるようなおはじきなど

を一つ、うたいながら廻す。

さらばよ　さらばよし

静かにわたす

こがねのゆびわ

鬼の来ないまに

ちよいとかくす　よいよい

(鈴木博子)

○絵描きうた

△つるにはののむし

(佐藤京子)



△兄ちゃん^{にい}が三円払って豆買って、くちばしとんがらして、あひるの子

(佐藤京子)



△棒が一本あったとき、はっぱかな。

はっぱじゃないよ、かえるだよ。かえるじゃないよ、あひるだよ。六月六日に雨ざあざあ降ってきて、三角定規にひびいて、コップペン二つ、まめ三つ。あんぱん二つ下さいな。あつというまに、かわいいコックさん。

(佐藤京子)



△まるまる、まるまる、丸木ぶね土人の顔に耳かざり耳かざり。父さん母さんさようなら、涙流してあら、えっさっさ、ろくろく、ろくろくさんじゅうろく、またもやろくでろくでなし。

(佐藤京子)



△なずなをゆでて タマリをかけて

たけのこ皮むいて あんかけて

戸棚のお砂糖ぺろつとなめた

三角めだまで にらまれた

それよりいつそう 死んだほうがいい

早く棺に入れられて

あたごの山にうずめられ

闇夜の晩に化けてくる

(山田富士子)

○ひ、ふんだか

ひ、ふんだか、みやさか、ずきんこか

ぶつて、とつとと歩けば、じいさんば

あさん、みつけのけ

(渡部美喜子)

○かぼちや芽出して

かぼちや芽出して つぼみがふくらん

で

花が咲いて開いた おつちよこちよい

の ちよい

(佐藤京子)

○赤いネクタイ

赤いネクタイ 長ズボン

山高帽子に 金時計

どうせおいらはなまけもの

うしろ向いて 前向いて

パイのパイのパイ

(増川百合子)

○われら仏の子どもなり

われら仏の子どもなり

うれしい時も 悲しいときも

みよやの袖にすがりなん

(梅津紀子)

○チナンポ

チ、チ、チナンポ

ナンチクリンのプライトパイポ

イマジヤ ニツチャパイポ シナポツ

ポ

(佐藤靖子)

○子守うた

こななおじよめこ

きつくりやのふつくりこ

としもいがのに

さきだちなどつれて

江戸で一番 新湯で二番

酒田で三番

よしのやで四番子

だて男 だて男

おじやのみ かやのみ

らっちゃんちゃん

(梅津恵美子)

○まじない

△雷「まんざいらく、まんざいらく」

△針をさがす「なかぬくも、なかぬくも、何がないとて、おいしかるらん」

(山田富士子)

昭和48年度三年一組の作品集

『置賜のむかし』の編集にあたつて

武田 正

いつだったか、昔話のことを話してくれというので、朝の招待席という、クラス番組に招待されたとき、昔話はむかしをなつかしむものでは断じてないという話をした。わらべうただってそうだ。それを唄って育った者が、どんなに幸福な人たちだろうかということを、この現在のいそがしい時代に生きる人々がどこかできつと知ることだろうと思う。昔話もわらべうたも急速に私たちの周りから失せつつある現実だが、それをこんな機会に書きとめることは、また生徒諸君の社会へ一歩踏み出す勇氣にもつながるのではないかと、私はその時語つたものである。

一つでもよい、二つでもよい、お母さんやおばあさん、近所の方に聞いて来て
もよい、とにかく一枚の紙に、なるべく聞いた通りの言葉で、そのまま書いて来

たら、学校を巢立つ春三月までに、ガリ版にして出してあげようと約束した。かつて私が担任したクラスに「わらべうた」を提出させたことがあったが、そう思ったようにうまく集まらなかったこともあったと考えて、期待もしないままに放つておいたが、一ヶ月後には、こんなすばらしい原稿が集り、そのために、うれしいやら、忙しいやら、一人でぶつぶつ言いながらガリ切りをしなければならなくなったことを悔いてみたが、自分で言い出したものでもあり、下手なガリ板刷りにして、まがりなりにその責を果たすことができるのは、ともかくうれしい。

生徒諸君の中には、自らテープレコーダーを使って、たんねんに翻字してくれた者もあり、資料としても十分なものも多く、ガリ切りを始めてからも質問に來たり、正月休みを利用してもう少し聞いて來たいという者もあった。そして始めて自分の意志で自分の仕事をやったという誇りを顔に出して何回も相談に來る。私にはそのことがうれしかったばかりか、就職も内定した後の、何にも手がつかない時期の、一つの在り方をさぐり当てたような氣になって、それもうれしかった。

昭和48年度卒業予定の三年一組のひそかなこの仕事は、きっと自分自身を一步すすめる意味で、すばらしいことにつながって行くことを信じて疑わない。よく学校長が「君等はやる気になればやれるんだ」と言う。そしてその成果が、これなのではないかと私は思う。

このささやかな三年一組の作品集は、自分が社会に出るとき、そして人の子の母となるとき、そして社会そのものが新しく変わって行くときも、きっと自分とその周りにいる人々に力になってくれるだけの意味があると思っている。

話者及び生徒諸君にお礼申し上げると共に担任に感謝したい。

編集にあたって色々な方々の御協力を得た。特に学校長、担任はじめ第三学年の先生方の御協力なしにはこの作品集は生まれなかったであろう。ここに深くお礼を申し上げる次第である。

昭和49年 元旦

置賜のむかし

昔話・伝説・わらべうた

昭和四十九年一月一日

編者・印刷 武田 正

発行 米沢東高等学校内

山形短期大学民話研究センター資料叢書

置賜のむかし

昔話・伝説・わらべうた

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十二年三月二十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かつばの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌ才さんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜のむかし 昔話・伝説・わらべうた』(一九七四年一月発行、二〇一〇年三月再刊)